「春ちゃんが、今度往く時は、お母さんをポッケットへ入れて連れてゆくと云ひながら、おいて往らつしやるのは、よつぽと親不孝ネ、」

なんて、誰かゞ云ひ出しますと、

「僕は無論連れて往くといふのですが、お母さんがいやだと被仰るから、其意に従つたまでゞ、つまり、僕が親の意にそむかぬといふ、孝心から一人でゆくのですよ、アハヽ……、」

するとお母さんが、

「私は一緒に往きたくはないのですが、よい御嫁さんをもらつて、二人で往くのだと、どんなに私も嬉しく安心だか知れないけれど、一向、働きのない伜て困りますよ、」

などゝ、とんだ所で、眞顔に述懐をおのべになる、そうなると、春ちゃんもだまつては居ず、

「僕が働きのないより、探して下さらぬ親の方がよつぽと氣がきかないサ、」

などゝ、酒が云はせる大元氣……、そこて、兎も角も、一年經つて、今度御歸朝の時までには、みんな總がゝりて、よい令夫人を探して置かうといふのて、此の話は一段落がつきましたが、さて今度は、みんなで春ちゃんに色々の御土産を注文する事になり、御子さん方は、ボールとか、ピストルとか、リボンとか、御人形さまとか、さま〳〵のものをおねだりになる、

「そこてたまさんは何が御望みなの？、」

と、春ちゃんが御聞きになりますから、

「私ですか、私は時計のくさり、」

「やあ、大したものを御注文ですな、」

「なあに、金やプラチナてなくてもよいのてすよ、鐵でも鉛てもあちらの最新流行の型て、一寸氣が利いてさへ居れば、何んでもよいのてすよ、」

「そうか、それなら、屹度買つて來ましょう、」

などゝ、たわいもない話をして、貪事を終り、食後には、また、應接の間に參りまして、皆さんが茶菓を召し上つて御出になる大テーブルの廻りを、私が先導になつて、四五人の御子さん方と手を牽き合うて、「汽笛一聲新橋を」などゝ、聲も勇ましく、唱歌をうたひつゝ、どん〳〵がた〳〵と室内をめぐつて居りますと、春ちやんのお母さんが、

「たまさんには困るネ、子供と同じ様にあばれてサ、……少し落ちついてお話をなさいナ、」

「ハイ〳〵どうも、あんまり御馳走を戴いてお腹が一ぱいですから、つひうかれましたので、」

するとちいさんが、

「たまさんは本當に妙ネ、平生御弱い様でも、召し上りもの丈は隨分よく上るんですもの！、」

「今日は、特別御馳走の御加減がよい所へ、つひ、御畫飯を戴かなかつたものですからねオホ……、」

それから、お互に廿年の昔に立ち歸つて、圭さんの書生時代や、春ちやんの子供時代、私達の娘時代に、色々と、春ちやんのお母さんに、世話をやかせた話などが出まして、誠に面白をかしい一夜で御座いました、明くる七日には、船が午前八時に出帆するといふので、朝は大急ぎで、みんなで仕度をして、東京から忘れものを持つて來る人々を待ち合せて居る間に、私が、フト圭さんの毛髮を見ますと、妙に前の方が、チリ〳〵のクチャ〳〵になつて居りますから、

「アラ、圭さん、今朝はあわてゝ髮を梳かす事をお忘れになつたの、」

「ナアニ、今ちやんと手入をして來たのだから餘計な世話をやかずともよいよ、」

「それでも、クチャ〳〵ですよ、」

と、つひ、私が云ひはりますと、クチャ〳〵と思つたのは全く私のおもひ違で、横濱邊では、外國人との交際が多いために、曾ては、無骨漢で有名な圭さんも、生死河のお爺さんになられて以來は、髮に鏝をあて〻わざ〳〵、毛をちぢらして、お出てのだと聞いて、私は口あんぐりの大驚き……而かも、妙な所で、保護同化の天則を、しみ〴〵實見致しました、

その內、早稻田の蛙さんが女中のおこの婆やを連れて、息せき、忘れものを持つて、東京から來られましたから、圭さんの御家族も、一同車で波止場迄參りました が、今日はもう、一昨日とちがひ、見送りの方というても、ほんの少數の親しい方ばかり、中にも、橫濱の方では、閻魔の大平さん（檢事）、東京の方では、木樵の和田さん（林學者）、腰辨の貫ちやん（法學士）、それに、一昨日おなじみの、ペンキ屋の知太さんに、五月花士官などが主な方で在つたのです、然るに私が、貫ちやんの外套が、妙に長くて、殆んど、ヅボンの丈と同じ位なのを、不審に思つて、御父樣の御さがりか、もしくば、御兄上からの、御借りものではないかと、つひ、うつかり、其事を伺ひますと、長い外套は、目下の最新流行形であるものを、大に失敬な事を云はるゝ、……改めて官吏侮辱の罪に問ひますぞ、などゝ、したゝか、返り打ちに逢ひまして、大にまごつきましたが、イヤハヤ田舍者が、稀に都へ出て參りますと、色々、新事實の新見聞をしては、驚くばかりで、お耻かしいとも、何とも、實にお話になりません、

其內、皆さんと、春ちやんとの御挨拶が一應濟みますと、一同で船へ上つて、寢室から、喫烟室、談話室、運動場、中には、機關室までも、御覽になつた方が在つた樣でしたが、運動場には十四五歲の外國風の女の子の手を捉つて、頻りに別れを惜んで居る日本婦人が妙に一同の注意を牽きましたが、これが、實は母子訣別の愁歎の場で在つたので、子供は、父親の鄕里なる和蘭をさして、一人でゆくのであつた、と云ふ事は、遙に後の春ちやんの通信に依つて解りました、最後に、

大廣間の食堂へ參りまして、シヤンパンを抜いて一同ブロヂットをして、いよ〳〵春ちやんの出立を祝し、互にお別れの言葉を交しつゝ、棧橋を降りて參りますと、直ぐにもう船は岸を離れる、……船は佛國汽船ポリネエシエン號……はや此時は、私も更に無駄口をきく勇氣もなく、たゞ〳〵手巾を振りつゝ、茫然と往く手をながめて居りますと、船は次第〳〵に遠ざかりつゝ、少さく〳〵なりゆく時の心持!!、實に何とも云ひ樣のない、自分も共に〳〵浪に引き入れらるゝ樣な、心細い〳〵感じがせられました、

再び西戸部の圭さんの御宅へ引き返して參りますと、春ちやんの御母さんは、頻りに涙ぐんで居られる、私もなぐさめの言葉に困りて、やはり共に悄れて居りましたが、其時のお母さんの詠み出てられました歌は、

おもひ子は今船出せり異國(ことくに)の
　あらき波風立つなさわぐな、

ア、、實にこんなのはたゞの歌といふのてはなく、ほんに眞情を吐露せられた心の聲でありましよう、

けれど、お母さんがそのひとり子の船路を案ぜらるゝと同時に、たゞ一人の御老母をおいて、遠く旅立つてゆかれる春ちやんの胸中も、また、どんなてあつたでしよう、……私がいつぞや見ました何かの本の中に、「啼泣豈に悲哀の符號ならんや、諧謔談笑の中にも自ら斷腸の憶は在り」といふ言葉が在つた樣におもひますが、定めし、春ちやんの今朝の御心持も、こんなてありましたらうなどゝ、私も心中何ともいへぬ悲哀の感に打れました、

子をおもふ心も共に寫し繪の
　かげを離れぬ姿とぞ見よ、

これも、お母さんが、其當時御自分の寫眞にそへて、春ちやんに御贈りになつた歌と記憶致します、

あゝ春ちやん、春ちやんは、今頃は和蘭の都で、どんな夢を見てお出でやら、春ちやんの夢に入るものは、故國か、母君か、私は更に、春ちやんの夢を夢みて、深き〳〵瞑想に陷りつゝ、此の日記を書き終りました……然るに今日、丁度、春ちやんが、博士になられたとの報を得ましたから、此日記を書いた筆で、直ぐに、お母さんへ、御よろこびをいうて上げました、今迄は、博士といへば、何だか年とつた方の樣に思つて居ましたが、今、春ちやんがなられたと聞いて、却つて、妙な感じがします、それも其筈、春ちやんは、今年やつと三十ですものネ、……最後に再び、あゝ、春ちやんは今頃どうして御出でやら?!……、」

清見潟の假住居に認む、（明治四十一年）

戊申春三月

妙華園の灌佛會（米峰評）

頃は四月の春なかば、人の心も花になりぬるきのふ、きふ、「新佛敎徒」の釋尊降誕會が、品川なる河瀨秀治居士所有の妙華園にて催さるゝとの案內狀をうけ、我等も上京中を幸ひ、前日より、誰かれを語らひて行く事に定めつ、さて當日は、朝來の雨!、さてこそ、新佛敎徒、平生の御精進のほども現はれけりと、その功德を讃嘆しつゝ、（米峰曰くあれて天氣でもよからうものなら、人死（ひとびに）の出來る程の盛會となつたであらうが、この日の雨は實に新佛敎徒が人命を尊重する微意の發現に外ならないのである、有難くもまた尊とからずや）合羽を着、傘をもちて、その物ずきを笑はれつゝ、小石川なる假寓の門は立ち出でけり、途すがら、一寸澁谷で電車を降りて、道玄老人（敢て融道玄君の事にあらず、貴族院の議員で、常に佛敎徒の事業に多大の助勢を與へて居られる篤志家である、）の一家族を誘うて、大崎驛にと着く、

そも〳〵、今日の祝賀會招待券の示す所によれば、大崎驛より妙華園まで五丁程とあれど、停車場の標札には、チヤンと七丁と明記して在る、ヤン〳〵困つた、

この泥道を、二丁のかけ値は恐れ入ると、ひたすら思案に暮れてあれば、そこは此邊の地理案内を心得給ふ老人、眞直に、汽車の線路を傳はつて、正札かけ價なしの五丁以内にて、妙華園へと導かれしは、嬉しいなんどいふばかりなし、(新佛教のやり方は、萬事この通りサ、ヘヽン)

入口で記念の櫻花をもらつて、(世間並の造り花でないといふことを、一言褒めて貰ひたいものだ、)先づソロリ〳〵と式場へと參れば、今日の大施主たる河瀨居士を筆頭に、新佛教徒に、其人ありと知られたる、ヨネミネ(米峰)大明神、咄堂大菩薩、秋畝大阿羅漢、其他、宗徒の面々、各散兵線を張りつゝ接待の任に當り給ふ、さては、來賓中に見ゆる、當世風の紳士淑女、これなん秦敏之先生、幷に、同夫人とぞ註せらるゝ(豈啻に、秦のお揃ひのみならんやだ、)

河瀨居士と、道玄老人とは、久潤の挨拶などあり、老人は引き連れし一婦人を顧みて、これは、私の娘てと紹介せらる、然るに、そも〳〵、其娘といはれし御方様の、御年はといへば、四十餘歳!、顏にはすでに、さゞなみをよせ給ふ、我等と同じき年輩の刀自にてましませば、一同の視線は、おのづから他に同伴の、花の如き令嬢の方へと移る、(娘か孫か、どッちへ挨拶してよいのか、かく申す某も、一寸頭の持ッて行きどころにまごついた、)

何はさておき、まづ佛前へと額きて、小指頭ほどのひしやくを採つて、丈け三寸に、天上天下を指示し給ふ、唯我獨尊へ甘露を灌ぎ奉る、花御堂は、さても美しや、いみじき花の數々はいはずもがな、その色の配合に、ひたすら感心仕れば、これぞ加納鐵哉氏が、古式に則つての御苦心よりなりしものとか、……さては奥の間正面の遍額に、「閑雲」とあるは、行誠上人の御筆なる由、さすがに、解脱の相は、文字の上にも現れける、床に「南無阿彌陀佛」とある一軸は、葛城慈雲尊者の御筆跡とか、自力奮闘主義の新佛教徒の會合に、尙且、他力易行の御本尊の、御名を拜し奉るぞ、有り難き、(地獄必定の狸婆さんでさへ、こんな殊勝氣な

よまい言をいふのだもの、自力主義の新佛敎徒の會合に、六字の名號が飾つてあッたッて、何にも驚くには當るまい、）

餘興は、里神樂と、百面相！（この日の餘興中、最も誇りとして居た太々神樂を忘れては、濟むまいぜ、）里神樂は、嬢チヤマ、坊チヤンの大氣に入り、われ等も一寸立ち寄つて、拜觀な仕る、今や、五六人の雜兵が、酒宴の眞最中、傍らに、大將らしき二人が、手に〳〵弓矢を持ちて談り合ふ所、藝題は何ぞと、接待委員の方々に伺へど、不識とのみは答へ給ふ、古風なる面を被りて、無言のまゝの、手ぶり所作事、こゝにも、以心傳心敎外別傳のみをしへは、行はれけりと、感嘆してぞまかんづる、（イヨー婆さん、チヨイとやッたなァ、）

百面相の餘興演者は、築地邊の御院主樣（築地村由來多士濟々、女優を出し、落語家を出す、本願寺樣のお膝元は、ナントエライものならずや、）とかや、達磨の眞似、焰魔の眞似、恵比壽のまね、其他、ひよつとこ、章魚入道、いづれも眞にせまりて、笑聲湧くが如し、しかるを、何處の痴れ者ぞ、かゝる餘興よりも、新佛敎幹部委員諸氏の御顏を並べて拜見する方が、はるかに興味は深かるべしなど、口さがなき事をひそ〳〵語り合ふものゝあるにぞ、微笑をもらす人もありたりき、（誠に以て怪しからぬことだ、）

われ等今日は、兼ねて會合を約しおきたりし人々も多かりければ、そこ、こゝと、探しあるけど、一向、親しき人々の姿は見えず、（化かされまいとの御用心に出でたるもの、流石に世人は賢くまします、）大かたは、午前の雨に、御足にぶりしものならむと察せらるゝ、さるにても、午後には、大ぶりも、小ぶりもせぬものをとおもへど詮なし、中にも、四五日前御目にかゝりし折に、きつと、必ず、くれも、約束したりし、楚人冠杉村氏の母堂も見えず、たゞ〳〵御孫さん達ばかりの、御出ときくぞ是非なき、（楚人冠も來た、親子三人もやッて來て、「きくぞ是非なき」は、隨分心細い譯のものかな、）しかし、こゝに一ッ嬉しかりしは、中村

膽山先生の御紹介にて、我が幼時の舊學友、中牟田夫人に邂逅して、互に廿餘年前を語り得し事どもなり、さても膽山先生、今日は、フロック姿の、勇ましくぞ出で立ち給ひける、（アレでも文學士だ、フロック位は持ッて居るサ、）

あまざけ屋の、接待長官、は鼻觀音の偉稱（又鼻か、……イヤ、鼻と雖も、かう有名になれば、甚だ以て榮とすべしだ、）ありとぞきく境野黃洋大先生、羽おり袴にて、いかめしく差扣へ給ふにぞ、おそる〳〵御前にて、一杯頂戴仕る、（黃洋の方で、おそる〳〵御接待申上げたと言つて居た、誰か烏の雌雄を知らむやだ、）

園の溫室には、金蓮花、匂ひすみれ、「シクラメレ」などの草花は、數知らず咲き匂ひ、その他、牡丹、藤、つゝじの類も、みごとに咲き揃ひたれど、惜しや、「チューリップ」をはじめ、其他圃場（はたけ）に在るものは、開花至つて尠なく、園內なほ寂寥の感あり、（それだから、お神樂の太鼓で、景氣をつけて置いたぢやないか、）

さりながら、天然の川流を自由に應用して、庭園を構成したれば、いたる所に、水聲潺々としておのづから俗耳を洗ふに足るとやいふべき、もしそれ、菖蒲の開花時に杖を曳かば、いかばかり興やふかゝらむと想像す、（といふ柄とも覺えはべらず、）

また傍はらの丘上に、地主の稻荷の一小社あり、初午ならぬ灌佛會に、のぼりを建て、供物をそなへられしは、おいなりさんも、妙な機會に遭遇せられしものぞと、その不可思議因緣をおもひ〳〵參拜し奉る、（この稻荷については、故事來歷なか〳〵面白い話あれども、狸婆に向つて狐の講釋でもあるまい、わざと差控へる、）

山上には旭日旗と、園の記號ある三色の旗と、二つたてゝあるのみ、あはれや、新佛敎徒は、六金色の旗一つ持ち得ぬはかなさよといへば、道玄老人は、「それてこそ新佛敎なり、財の在る所には弊生ず、舊佛敎の宿弊は、今や見るに堪へず」と言ひ出て給ひし（流石に老人は、老人だけの事がある、）にぞ、案內の委員樣、

とんだ所で、面目を施し給ふ、

婦人席は式場の二階、何人のいたづらにや、「女人席」と書いて、わざ〳〵、によにんせきと假名をふつてあり、(僕ならば、その上へ「五障三從の」と割り書きすべかりしを、黄洋は、流石にまだ善人なりき、)いづれにしても、一寸登つて見ばやとの好奇心を起し、米峰兄を促して二階へとのぼる、こゝはまた、一眸廣濶なる別天地！、遠く大崎の丘陵一帶を見わたし、菜黄麥綠さながら織れるが如しやがて、道玄老人も、河瀬居士も、二階の人となり給ひて、居士は、此所、彼所と、點々指示して、地勢を語り給ふ、伊藤公の墓所も、程遠からぬわたりにありとか、されど、近き將來に於て、この丘陵を取り崩して、中部鐵道の大工場を設けらるゝ豫定の由なれば、其の曉には、妙華園も、他に移轉の已を得ざる事となるべく、隨つて、新佛敎徒も、降誕會の好道場を失ふ事とならむと聞くも遺憾の種なりけり、(こゝだけは同感だ、)

二階にての談柄は、なか〳〵に數多く、佛敎各宗の情況より、話は、飛んで、神道にも、ユニテリアンにも及び、はては、繪畫談にもうつりて、感興は容易に盡くべうもあらざりけれど、歸路に再び、道玄老人の宅に伺ふべき約なれば、惜しき別れを告げて、園を辭す、(ヤレ〳〵、ヤットの事で惡婆拂ひをして、ホット一息仕ッた、)餘興の笛太鼓は、尙はるかに林間にひゞくと共に、淸涙の聲の泉水のほとりにきこゆるは、これぞ、高貴より河瀬居士に賜はりし、丹頂の鶴なりとかや、

再び澁谷にて電車を降り、老人一家とともに卓を圍みて晩餐を喫しつゝ、藩閥の餘勢の、なほかつ、慈善事業にも、護法機關にも及ぶ通弊をはじめ、其他にも、種種の新聞以外の珍聞承りて、いよ〳〵歸途に就きしは、夜もはや八時を過ぐる頃なりし、巢鴨停車場より、みちすがら、一寸、米峰兄の所へ立ち寄つて、今日は、遲參して、折角の咄堂先生の大演說をきゝ得ざりし殘念さを述ぶれば、演說はな

くして、唯、河瀬居士の奠德文を朗讀せられしのみと聞いて、内へかへつて熟睡の床に入り、夢はいつしか、藍毘尼園の花下に逍遙す、（そりや嘘だらう、文福茶釜になつて、お寺の和尚のところへ出かけ、お神樂の太鼓の音につれて、綱渡りの藝當を始め、やり損ツて足踏みはづし、無間地獄へ眞ッ逆まにおつこちンとするところを、僕が紫の雲に乘り、頭から光明を放つて救ひに行ッたが、慈雲尊者の「南無阿彌陀佛」が邪魔をして、カチ〳〵山へ追ひ込まれたり、泥船で沈没したり、とゞのつまりが、妙華園のお稲荷さんに頼み、油揚半分貰つて、空腹を凌いだ位なところに、相違あるまい、）あなかしこ〳〵、

米峰曰はく、何のかのとは言ふもの丶、あの天氣に、人まで誘つての御尊來さへ、殊勝の段褒め置くべきものだのに、頼みもしないのに、記事まで書いて呉れるといふ志、誠に以て神妙々々、願くは此の功德を以て、惡業深き狸婆に施し、來世は、眞人間に生を享けさせむ、ともどうとも勝手にせい、喝、（明治四十三年）

本野大使と共に三越呉服店を見る

私が本野家を御訪ねしたのは、七月七日、――即ち大使が御歸朝になつてから、丁度、十日目――の午前で御座います、一應、まづ、御玄關におとづるれば、何時の間にやら、私の顔を見知れる御取次は、直ぐに奥へといふのです、すると、もう端近に、夫人の久子さんの御聲がして、

「まあ、たまさんですか、御約束の時間は、遠に通り越して居るのですから、先刻から待つて！、待つて！、」

と被仰る、そこで私は、

「どうも、西洋時間を守らないで濟みませんが、今日は、御外出の御日どりの樣に新聞で承知致しましたから、御留守に參つて、待ちぼうけもつまらないとおもつて、わざと遲れましたので、」

「相變らず、のん氣な事をいうて居らつしやるのネ、今日は、その豫定の外出が止んだので、午後には、三越呉服店に行かうといふのです、」

「三越へは、私はまだ參つた事が御座いませんから、丁度よい折から、御一緒に御供を致しましようか、」

「え!?、あなたは、まだ、一度も居らつしやらないの?、」

「勿論、私などの樣な身の上の、而かも、田舍にばかり居りましては、三越などへ行く用事の、あらう筈がないては御座いませんか、」

「それもさうネ、……ては、兎も角も御飯も頂いてから參りませう、」

との仰せにまかせ、不遠慮の私は、早速御家族と共に食卓に就き、色々、露國の飲食物や、其他の御話も承りつゝ食事を終り、食後には、夫人の御衣裳部屋へ往つて、夜會服をはじめ、いろ〳〵の御召を見せて戴き、其模樣の優美な事や、配色の調和のよいのに感心し、また晝夜によつて光澤を異にする寶石を、本野さんに說明していたゞいたりして、さて、いよ〳〵、麻布鳥居坂の御屋敷を出かけたのは、午後の一時半、大使御夫婦と、御母堂と、私と、つまり四人で、一臺の馬車に乘つたのです、

私は、如斯久しぶりに馬車に乘つたので、いつぞや、まだをさない娘の頃、久子さん（こゝで夫人といふと、どうも人情にうつりませんから、やはり昔通り、久子さんと呼ばせて戴きます、）と御一緒に、馬車に乘つて淺草あたりへ遊びに往つた時の事を、心ひそかにおもひ起したのですけれども、常日頃、シャンジェリジェー（巴里）の大道や、まつた、ネバ河岸（露都）の大通りを先を拂ひつゝねつておあるきの久子さんには、今、馬車に御乘りになつたからとて、格別特殊の感想の御起りになる筈はないとおもつたばかりでなく、久子さんとは、此の間、途中まで御迎ひに行つた時に、色々承つた事も在るのですから、今日は、態と、話頭を本野さんの方へ向けたのです、

「久しぶりの御歸朝で、少しは日本の變つた所が、御眼にとまりましようか、」
「されば、……道巾の廣くなつたのと、電車の出來た丈けは確かに變つた樣ですな、」
「其ほかには？、」
「其他にも色々ありましようが、…繪畫などはどうも惡い方へ變つた樣ですな、」
「近頃は、畫家も昔とは違ひ、よほど新畫題などを撰ぶのに、注意を拂つて居る樣に聞いて居りますが、」
「それがです、何人も、西洋の摸倣をやればよいと思つて、而かも、其短所迄を、短所と氣付かずにまねるから惡いのです、」
「短所とは？、」
「おしなべて云ひますと、西洋の畫は沒線描法で、着色を重視して居るのですが、日本の繪は、線が重なものに成つて居るのです、然るに、近來の西洋人が、日本の線法を學んで、甚だ不完全にそれを現はしておくのです、それを、その拙ない線法を、西洋畫の特色でゝも在るかの樣に心得て、日本の連中が、尙より拙なくそれを摸寫するから、結句見るに堪へぬ拙劣なものが出來上るんです、」
「へー成る程、……」
などゝ感心しながらも、談話はいつしか道路の觀察などに移りゆくほどに、梅雨中を珍らしくも日光が射して來たので、久子さんが、洋傘をひろげて、御母堂にさしかけて御あげになる、私も向ふへ屈むで、其蔭にならうといふ、稍づるい方法を案出して日光をよけて居る中に、ふと其洋傘の柄について居る、銀製の鳥に眼がつく、
さても、此洋傘は、今度、大使が御母堂に御土産に御持ちかへりになつたものださうでして、そのかざりの銀の鳥は、「コックドボアー」というて、露國に居る山鳥の一種ださうですが、日本の雉子に似て居て、もそつと大きく、かつは、非常

に耳の敏い鳥ださうで、此の鳥を狩に往くのは、なか〳〵六ケしいとの事です、かくて、短時間にもかゝはらず、私は、何んでも、かんでも、見るもの、聞くものを珍らしがつて、久子さんの鰐皮の小さい手かばんの中を明けて、其中に在るものを、色々引出して、説明を伺つたり、おねだりしたりなどしつゝ、して居る内に、馬車は、いつしか宮城前の廣い道、――あのそら、芝生に小松の生へて居る附近、――まで進んで參ります頃、久子さんが、路傍を通行なさる御若い紳士を見かけて、

「アヽ伊藤さん！、」

と被仰ると、先方も、帽を脱つて一禮なさる、馬車稍行き過ぎてから、本野さんが、

「勇吉さんだつたか、」

と御訊きになる、私はまた私で、

「勇吉さんとは、先達、御名の代つた、博邦さんの事ですか、」

と、つけ加へますと、

「えゝ、えゝ、さうです、」

とは、久子さんの御返事、

そこで、私はひそかに思ひました、一體、私達の考へに依りますと、公爵様の御世嗣とでもいへば、黒塗馬車か、然らずとも、二人曳位の俥に乘つて、都の塵を蹴だてゝ御通行なさることゝばかり思つて居りましたのに、豈に圖らんや、只、御一人の御徒歩！、一寸、意外な感に打たれました、かゝる感想に耽ける間にも、馬車はずん〳〵進んで、日本銀行や、正金銀行の、立派な建物の前を通り拔けて、いよ〳〵三越呉服店に近づき、正面の入口の所へ着きますと、店員の高柳さんが、ちやんと、もう其所に待ち受けて居らつしやる、又、あたりには、白い揃ひの洋服を來た下足番が、大勢群つて居るのです、私は、今この洋服の下足番を見て、

先年、大阪の三越店で、女の店員が、(賣方がみんな女で在つた樣におもひます、)みんな、洋服を着て居るのを見た時程、異樣な感には打たれなかつたのですが、併し、やはり、下足番などは、もゝ引、紺かんばんの方が一種の日本的雅味を帶びて居はしまいかとおもはぬでもなかつたのです、今日、途中で逢つた、露國馬車でも、みんな、御者、馬丁共に、日本式のいでたちなんでしたからネ、人の好奇心といふものは、却つて妙なものぢやありませんか、

徒言はさておき、いよ〳〵店内へ這入りますれば、先づ、階下から、階上へと、順に見樣とするのが、誰しも人情の赴く所でしよう、然るを高柳さんは、階下よりは、二階へ、二階よりは、三階へと、觀る間もあらせず、歩を早めて案内をなさるのです、私は、どうなる事かと、不審におもひつゝ、皆さんの後へ附いて參りますと、すうつと、三階の端の、特別接待室へ請じ容れられるのです、扨こそ高柳さんが歩を早められたのは、この爲て在つたと、おそまきながら、合點せられたのです、

其うちに、御茶が出る、御菓子が出る、美事な果實籠も出て來る、色々の御馳走が並び終つた頃、番頭がしらとでもいふ人てあらうか、絽の羽織を着た老人が、主人が不在の言ひ譯やらを、極めて慇懃に述べて居られる、もしも、これが御大名の御屋敷などなれば、さしづめ、此老人は、接客係、何々佐渡守とでも名のるべき人てあらうか、客をそらさぬ中に、自ら、自分の品位をくづさぬ所、さすがに、三越の老番頭さんとぞ見受けられました、

さてこの接待室は、一寸見渡した所、二十疊敷位の大さで在つて、巴里の、日本大使館の喫烟室と同じ裝飾ださうて、何から何まて、竹づくし、つまり竹の間といふのださうてすが、私は、皆さんを稍離れて、一寸傍の方の小さい机によつて、きよろ〳〵と、室内を見廻したり、覺え書きをしたりして居たのです、

まづ、四方の壁の、下方三尺ばかりは、本物の燻し竹て、それから上方は、絹地

に青竹を畫いたものを張りつめて在るのです、窓掛は、廣巾の壁縮緬に、竹に雀を圖案様に染め抜き、雀には、一寸、金糸の縫があしらつて在り、明治の仙臺萩の若君の御部屋とでも云ひたい様！、卓子にも、椅子にも、そこらに在る置戸棚にも、植木臺にも、みんな竹の彫刻が施して在つて、唯ストーブの上が、茅葺屋根にかたどつて在る丈が稍異彩を放つて居るのです、而して、此室内のすべての圖案は久保田米齋氏の意匠に成つたとの事ですが、ストーブの前に立てゝ在る小さい銀屏風、これには、墨繪で枯木に鳥があらはして在るのですが、それが、場所柄、何とも云へぬ程、引立つて見えるのです、私は、先年、泉州の或るお寺の寶物で、雪舟の筆の同じ様なものを見た事が在りますが、如何に此部屋にあればとて、どうも、これは久保田氏の筆ではないらしい、さりとて、雪舟が甦つて來る譯もなし、はあて、誰だらうと、一寸、高柳さんにおたづね致しますと、果して、京都の竹内栖鳳氏の筆だとの事です、其外にも、大きな花鳥の屏風や、山水の屏風が、位置よく配列してあり、又、鹿皮の椅子が、五六脚、別に壁際に立て並べて在るのですが、その斑紋と云ひ、色合ひと云ひ、如何にも眞に迫つて居るのですが、試にたづねて見ますと、勿論これはこしらへものだとの事、なるほど、斑紋の工合も、大さまでも、揃つて居るのですものネ、かゝる分りきつた事を、改めてたづねたりするので、いよ〳〵私は田舍者の本性を現はした事と御一笑下さいまし、其他植本鉢には、純粹の竹や、棕梠竹をはじめ、常春藤や百合なども種々あつて、清風おのづから、室内に生ずる有様です、

やがて、室内を一順見終つてから、皆さんの卓子の方へ行つて、本野さんから、そこに在つた、巴里の大使館の寫眞を見せて戴き、色々説明も伺つたのです、

そも〳〵、巴里の日本大使館の室内装飾は、悉く三越呉服店が、御用を承つて、取りまかなつたとの事ですが、其價格、實に十三萬圓餘、彼所には、竹の間許りでなく、菊の間、櫻の間、紅葉の間、武器の間なども在つて、いかにも善美を盡し、

中にも菊の間の格天井の如きは、最も精巧を極めたるものなりとか、やがて、私も御相伴に茶菓を戴いて　それから、そろ〳〵陳列場の方へと出かける、

接待室を出てゝ、先づ外國人向きの輸出向きの一區劃の方へと足を向くれば、まづ最初に眼に入るものは蜜柑色の地合ひに、萠黄の模様を染め出したる、極めて派出な友禪縮緬の厚ぶさの着物が、高く目に立つ様に懸けて在るのです、どうもこれは襠とも、長襦袢とも違ふ様だが、はたして、何だらうと、小首を傾けて居りますと、久子さんが、

「これはネ、外國人が貞奴と呼ぶ着物なんですよ、いづれ、外國人むきのものですから、そうら、傍に帶に用ゐるしごきが添へて在るでしよう　つまり「きものさだやつこ」と申しまして、貞奴式の着物といふやうなわけで外國人が珍らしがるのです、」

「へ!!、さうですか、」

さては、此頃日本では、川上夫妻が外國人の贅澤風を輸入して、風俗を華美にするのは、戰後の經營をする日本に對しては、甚だ不心得極るものだなどゝ、一部の人々の攻撃なさるのを耳にした事も在りますが、これで見ると、貞奴は、やはり日本の華美をも外國に輸出して居るらしいですが、かくて、一貞奴が、東西風俗のメヂエーターになるなどは、さても、さつても、世の中の事は、意外の邊に、意外の勢力の在るものに候はずや、

それから、本野さんが、まづいと被仰つたヌーボー式縫取り座ぶとんの在るあたりを通つて、髪の道具の在る場所に行くと、束髪用の三ッ櫛など澤山並べて在るので、私は、つひうつかり、久子さんに向ひ、

「先年、貴方が御歸朝の時、三ッ櫛をさして居らしたでしよう、然るに日本では、やつと此頃が流行よ、どうしても日本は五六年流行が後れて居りますのネ、」

と云ひますと、これをきゝつけたる、こゝの係の番頭さん、何條この話をきゝも

らすべき、

「イヤ、今でも外國人樣方が、澤山是等の品を御土産に本國に御持歸りになります、これでも、流行に後れぬ樣に、大かけ足で骨折つて居るつもりで……」

私は、かく云はれて、バットまごつきました、すると、さすがは交際に慣れ給ひし久子さん丈あつて、

「外國では鼈甲が、大變珍らしいですからネ、」

などゝ、取繕うて下さつたので、やつと、私は其場を逃れたのです、

今度は、極々薄地の織物、左樣、透綾の樣な、明石の樣な、練に似た樣な地合ひのものですが、色々の斑紋や、織や、筋のあるもので、勿論、此所のは、皆洋服向で、頭巾に用ゐる狹い物や、服地にする巾の廣い物や、種々あるのです、中にも、此頃外國では、外出の時殊に夜會などに行く時には、例の繪に畫いた辯天樣や、天人の身のまはりに、ひら〳〵としてゐるあの領巾見た樣なものが流行するとの事で、そんな種類に出來上つたものも澤山ありました、全體、日本では、羽毛のボーアなども、しつかり項の周圍へまきつけますが、これも、外國では、やはり、肩から腕のあたりへたらして、たゞ飾とするのださうで、現に、今日久子さんも、水色の羽毛のボアーを、そうしてたらして居らつしやるのです、服地の出で、薄鼠る絹縮に菊の縫の在るものが、一組久子さんの撰に入りました、

それから、今度は白キャラコの、寢臺かけ、食卓かけ、茶卓かけの樣なものを、久子さんが、しきりにくりかへして見て居らつしやる、緣に輪廓を拔いたり、中に花鳥や福壽などいふ文字さへも、拔き模樣になつて居るのです、

「日本通の外國人樣方は、福壽などいふ文字の意味を充分御承知て御求めになる方もあります、」

とは、番頭さんの話、本野さんは、

「安いものだなあ、つまり人間の勞力が安いからだ」

と被仰る、私は、

「買物に來て、安いと御賞めになるんで……、」

と、いうて笑へば、

「高いというてもまけはせず……、實際安いものですよ、外國から持つて來る御土産は、一寸したものでも、みんな勞力が高くついて居るから、日本人の想像以上ですが、日本から外國へ持つて行くのは、割合に得です、」

などゝ御話になるのをきゝつゝ、私は別に、天鵞絨の模樣物を見て、精巧に織つたものだと感心して居りますと、本野さんが、わざ〳〵裏を見せて下さつて、

「そら友禪です、織つたのではなくて染めたのです」

と御笑ひになる、私は何といふ阿呆でしよう、今迄、度々天鵞絨の袱紗や皿敷を見たり、さては、いつぞや高島屋(?)で大阪の博覽會へ出品した、大きな〳〵、廣巾の山水畫の天鵞絨を見た時も、やはり、精巧な織物だとばかりおもつて居たのですよ、それも、これも、いつも見るばかりて、自から所持した事がないから、こんな思ひ違ひをしたのでしよう、呵々、

其内、大概に此所を切り上げて、それから、漆器の蒔繪類の在る所へゆく、蒔繪には、お金のかゝつたもの、手間のかゝつたものは、澤山在る樣でしたが、さてこれぞというて、醇雅な品の見當らなかつたのは殘念です、外に一ッ、鎧櫃に象どつた箱が在りまして、木理(もくめ)ある欅(?)を研き上げて金の金具を打ち、前面の觀音開きには、絹糸の緋房が附いて居て、非常に艶麗で立派なものでしたが、始めは衣裳箱かとおもつて、よく見ましたら、中が袋戸棚になつて居るんです、

具足櫃を戸棚にしたとは、成る程、珍奇な意匠かも知れませんが、併しどうして、も私達日本人の眼には、調和を缺いだ所が在る樣におもはれました、

こゝで、私は、本野さんに一寸伺ひ漏しましたが、この品は、或は巴里の大使館の、武器の間へ備へつけて在る品と、同じ模型ではないかと、今になつてから、

おもひ起して居るのです、

蒔繪の區劃に隣接して、チャンと表裝して出來上つた、掛物や、屏風などが澤山在るのです、玉章さんのも、寛畝さんのも、それから故雅邦翁のも、または、京都の景年さんや栖鳳さんをはじめ、種々の先生方の種々の佳作が在るのです、そしてその向ふが陶磁器類！、此等は、皆三越から圖案を廻して、京都の錦光山で窯かせるとの事で、花瓶や、其他のものも在りましたが、陶磁器中ではおもに會席風の食器類が多いので、チャンと御膳の上に揃へて並べて在つて、しぶい樣な、おつな樣な、氣取つた樣なものが、色々ありました、

「かう、何んだか、宛然、博覽會の工藝館へ這入つた樣な氣持が致しますのネ、」

と私が云ひますと、御母堂は、

「どうも、これでは高等勸工場ですよ、」

と被仰る、ハット氣がついて見ると、足許には、籠細工の炭取が幾個もころがつて居るのです、其内久子さんが銀細工が見たいと被仰つたので、私と二人で、其方へ行つたのです、銀細工も、そんなに品數は澤山ありませんでしたが、御注文になれば、何んでも拵るとの事でしたが、久子さんが、

「今直に欲しい樣なものも在りませんから、少し休みましようか、」

「本野さんは、どうなさつたでしよう、」

「お母樣と二人で、何所か見て居らつしやるのでしよう、……今に、此所へも廻つて見えましようから、まあ掛けましよう、」

と、二人は傍に置いてあつた、安樂椅子へ腰をおろしたのです、

序に申しておきますが、此銀細工の所は、別に一區劃凸出して居て、四方を眺められ、大變風通りのよい所です、向ふの方では、他の縱覽人連が、久子さんの、あざやかな洋裝姿が、眼に立つためか、頻りに此方を凝視たり、指ざしたりして居るのです、されど私は、その方へ背後を向けて、久子さんと相對してかけたの

です、かくて、皆さんを待ち合せる間に、二人が話した事は、まあざつとこんな事です、

「私ネ、今度はあなたが、必つと痔せて御歸朝になるだらうとおもつて居ましたら、先日、お迎ひに出た時、あんまりおふとりて御元氣らしいので、實に喫驚り致しましたのよ、」

「何故？、」

「何故つて、露西亞は、大變寒いといふし、それに、長い〳〵西比利亞鐵道で、さぞ〳〵御疲れになつたらうとおもひましてネ、」

「露西亞は、寒いには、それは〳〵、非常に寒くて、冬中は大抵氷點以下で、ネバ河の上は、電車が通ふ程の厚氷が張りつめますけれど、それにはそれで、チャント防寒の設備が整つて居りますからネ、部屋は二重窓になつて居りまして、中には暖爐もありますし、外出には、裘の被服もあれば、完全な橇もあり、こて想像した程ではありませんよ、」

「橇って、やはり人間が牽くのですか？、」

「ナアーニ、馬の橇ですよ、腰から下は風の這入らない樣に、暖かくよく出來て居りますよ、」

「さうですか、……そして、先達一寸伺つた、ドラゴンネ、あれはどんな御樣子でした、」

「ドラゴン？、あゝ汽車の事ですか、あれはドラゴンではない、バゴンですよ、ドラゴンと申すと龍の事になりますよ、」

「左樣々々、つひ私はうろおぼえでしたものですから、オホ、、、、ドラゴンだなんて間違へて、」

ドラゴンと申せば、面白い話を思ひ出しましたよ、」

「どんな話？、」

「いつぞや、巴里で、新着の或る軍人さんをオペラに御案内致しましたらネ、其御方が、西洋の音樂にあまり趣味を持つて御出がなかつたので、つひ居眠りをなすつて仕舞つたのです、」

「まあ、」

「所が、其幕が、丁度夜の場で、舞臺も何も眞暗で、龍が出て來る所でしたが、其軍人さんの鼾聲が、ゴー〳〵といつたのを、隣に並んでお出だつた、お連れの夫人が、ドラゴンの鳴く聲かとおもつて御出でだつたとの事で、あとで大笑ひを致しましたが、其後、其軍人さんの事を、ドラゴンさん、ドラゴンさんと綽名して、お呼び申して居りましたのよ、」

「まあ、隨分、圓珍種ですネ、……そしてその、肝腎のバゴンは？、」

「バゴンは、今度私達が歸るに就て、わざ〳〵露國政府から寄贈されたものですが、客間もあれば、寢室もあり、勿論、風呂場もあれば、料理部屋も附いて居りまして、少しも、旅中の不自由はなかつたのです、」

「まあ、それでは恰度、一軒の家みたいですのネ、」

「あちらのは、廣軌鐵道ですから、巾も廣し、まあ、そんな樣なものでしたネ……、」

と、こゝまで談話の進んだ時に、先刻見失なつた、御二人の御姿が此所へ現れましたので、私達は、遺憾ながら、談話を中止して、立ち上りますと、御母堂が、

「もう、三階は大抵に止して、少し階下へ往つて買物を仕樣ぢやないかネ、」

と被仰るので、お後に附いて參りますと、チラと、側らの寫眞室と書いた、金文字に眼がつく、

「アヽ、當店に寫眞室があるのですよ、」

「寫しましようか、」

といふ間もあらせず、側のぬからぬ老番頭さんは、手をとらぬばかりにして、「ま

あ〳〵どうぞ、此方へ〳〵、」と案内をするのです、

此所は狭けれど、化粧部屋が二ッ並んで居て、鏡や、櫛や、其他の化粧道具が、一切整然と揃つて居ると共に、傍の衣裳戸棚には、老若男女、種々様々の衣服が重ねてあるのです、其中には、軍服もあれば佩劍もあるといふ有様で、誰にても直ぐ寫せる様になつて居るのです、

「當店では、歌舞伎衣裳を請け負うて居りますから、それはもう、二時間前に御通知を下されば、どんなお好みの御服裝でも調へます、……サアどうぞ御仕度を……」

というて、番頭さんが出て行つたと思ふと、入れ違ひに、衣裳係の女中が出て來て、かれこれ、久子さんの御身のまはりなどをとり直して居ります、

やがて撮影場の方へ行きますと、一寸まあ、奏任待遇とでも云ひ相な、立派な髯のある寫眞課長らしい人を始め、其他、洋裝和裝の五六人の助手が出て來て、勿論例の案内の老番頭さんも、衣裳方の女中も、大勢で、がや〳〵と撮影の用意をするのです、

そこで、私は、まあ、たつた一組の寫眞を寫すに、こんなに、大勢かゝつて、そして、どうして利益が在るものだらうと心ひそかにおもひました、どうも、大資本家のする事は、到底私達の様なものには合點がゆきかねる所が在るものですネ、

まづ始めに、本野さんと、御母堂と、久子さんと、三人で御寫しになつて、後から再び、久子さんと、私と二人で、都合二組寫さうと云ふ事になつたのですが、

始め撮影場に這入ると、直ぐに本野さんが其背景畫に眼をお注めになつて、

「アー、それはなか〳〵よく出來て居る様だが、誰の作です？」

とおたづねになると、

「イヤ、これは實は、そら、獨逸からわざ〳〵取寄せましたので、」

と番頭さんがお答へ申上げて居る、

「日本物で間に合せたらよささうなものだのにナア、」

「それが、どうも日本には、適當な背景畫家が御座りませんですから、その、どうも少し……、」

「背景畫もなか〳〵趣味のあるもので、かつは、相當に收入にもならうから、誰れかやるとよいのにナ、」

「ヘエ、ヘエ、御尤も樣で……、」

さるほどに、もう撮影の準備が調つたので、本野さんが中央にお立ちになつて、二人の御婦人方は兩側へおかけになる、

私はこれを遠くから見て居りますと、本野さんが、

「僕は、頭部の禿が見えるといけないから、少し仰むく事に仕樣かな、」

「それよりは、この方が、」

というて、私は自分の鼻の下を一寸おさへたのです、といふものは、本野さんのお髯はどう云ふ譯か、恰度お鼻の下丈が、眞白になつて居るのです、私はお目にかゝる始めから、それが氣になつて色々申上げて居たのです、まだそんなお齢でもありませんのにネ、

「ナニこれはかまはん〳〵、」

というて笑つて御髯を撫でゝお出になる、其内、

「ハイ、どうぞ暫くお靜かに！」

といふ事で、もう其方はおしまひになり、今度は、私達の順番となる、如何樣な風に寫しましようかと、久子さんと御相談をして居ります傍から、紺絽（こんがすり）の着ものに小倉の角帶を締めた小僧さんが、

「外景がおよろしう御座いましよう、」

というて、チョコ〳〵と、猿猴の如く背景掛に登つて、幽林の遠景あるものを卷きおろす、其所へ自然木の臺を出して、私はそれに腰をかけ、久子さんがお立ち

になる事となつたのです、

立つなれば、洋傘が在つた方がよいとて、とりにやつて、それの來るまで、待つ間に、私が、久子さんに、次の様な事を話しかけたのです、

「私今日ネ、馬車に乘る拍子に、フット、いつぞや、あなたとやはり馬車で、淺草へ御一緒に往つた事をおもひ出したのですよ、」

「私も、一寸おもひ出しましたのよ、」

「エーあなたも！」

「あの時は、淺草で玉乘りを見て、そして、おしるこも喰べに連れて往つてもらひましたつけネ、」

「さうでしたネ、もう、二十餘年になりますのネ、殆て夢の様ですワ、」

「今日も、あの時の様に仲よく寫しましようネ、」

なんど、女同志の事なれば、竹馬にはあらざるも、お汁粉の昔、玉乘りの昔、少女の昔に立ちかへつて、うつかり話をして居りますと、本野さんが向ふから、

「モシ〳〵、たまさんは、たゞさへ顔が大きいのに、そう前へ出ては、尙更、不調和になりますぞッ！」

と被仰るので、二人はハッと、今のお婆さんの現實に立ちかへつて、居ずまゐを直す、

「今日は、外國の田舍へたまさんが來た様な風に、もう少し姿勢を正してかゝらねば……」

どうも困つた事になつたわいと、モガ〳〵して居りますと、其時には、もう先刻の奏任髯の寫眞屋さんや、その他の人々も姿をかくして、紺綸の小僧さんと、もう一人居るきりです、

やつと撮影が濟んで、

「只今一寸現像してみますから少々御待ちを！」

といふ間に、今久子さんが、此店から貸りて御つきになつて洋傘を見ますと、水色羽二重の絞りて、なか〳〵派手な上品なものです、柄は白い象牙のやうなもので、それてたつた五圓餘の札がついて居るのです、

「まあ、安價いものだ事！」

と先刻「テーブル、クロッス」の所で、本野さんを笑つた私が、つひ、こゝでは又同じ様た事をいひ出しますと、今度は本野さんが、

「こんなのは外國へ持つて行くにはよいですが、併し之は格別安くはないです、」

と被仰る、成る程、私などは、絞りや、透綾の洋傘なんて、見た事がないから、相場が解らないのだなと、一人ひそかに感じて居りました、これでやつと撮影場を出て、二階へ降りたのです、

二階は將にこれ、綾羅錦繡の花盛り、宛然百花爛漫、眼も眩むばかり古代模様を織り出したる帶地もあれば、最新流行圖案の染抜いたる長襦袢もある、紋御召もあれば、壁市樂もある、紅梅織もあれば、好貴織もある、何んだか、かんだか、一々見盡しも出來ないのです、もしもこれが、御若い方であつたならば、一品を御覽になる毎に、頭腦中の大問題て御座いましようが、何がさて、浮世離れし、木の片同様の身にとりましては、唯、上野や向島へ御花見に往つたと同じく、漫然美しいとおもつて見るばかり、決して其木を我庭へ咲かせたいなどいふ慾望は出ないのです、つまり繪にかいたおだんごでも見る様な氣持て、格別垂涎もたらさず、ずつと横目で見て通つたばかり、さるほどに、久子さんが、外國へ御土産にする絽友禪の浴衣地が欲しいと被仰つたので、即ちその區劃の所へたどつて參つたのです、久子さんの御注文は、一寸まあ、粗筆の文人畫とでもいふ様な、氣品のある洒脫なものをとの事てあつたのですが、それがなか〳〵ないのです、さすがに第一流の店の事なれば、絽友禪といつても、五反や十反ては御座いません、實際、おまけなしに百反以上も出して見せたのですが、一向、適當といふのが見

當らないのです、やつと一反竹の模様の、極あつさりしたのがあつたかとおもへば、幹が疋田になつて居るといふので、御氣に召さず、瀧に紅葉でも在る様なのは如何でしようと、差出口をいへば、颯と擴ぐるおあつらへの一卷、哀れや、紅葉の色が濃厚に過ぐるとて、これも落撰、とう〳〵、此所は不得要領に立ち去るの已を得ざる次第となつたのです、然るに、私達が紹友禪を品評して居る間に、本野さんが、何所からか御自身用の夏帶を一本求めて居らしたのです、竪は、白無地の太節糸で、横には、一寸棕梠の毛の様な茶色の糸が織り込んで在るのです、それが、如何にも、粹で、上品で、人柄で、代價はたつた〇圓△十錢！

「さすがに、外交官様の御見立は、違つたものですネ、」

と御賞め申せば、

「イヤ、これは御母さんの御撰擇です、僕は、唯、賛成をした丈です、」

オヤ〳〵〳〵、不慣の者が、偶々、御世辭の矢を放つと、外るゝ事、大方此の如しです、

「併し、これは何んといふ織でしよう！」

と、つひ後に立つて居る若い番頭さんに尋ねますと、

「手前は存じませんが、どうぞ、あちらに居ります者に御聞き下さいませ、」

成る程、番頭さんの方も「デパートメント」になつて居るのだなと、頷きながら、今度はわざ〳〵、あちらの番頭さんにきゝますと、

「松葉織」ださうです、而して、此松葉織の事をきかせてくれた番頭さんは、染色、地合、紋形、寸法、何んの事でも詳しい様子でしたが、大方、越後屋時代の小僧から仕上げた人でゞも在るのでしよう、尤も、此事はあとで紋附を注文する時に、氣付いのですけれど……、

こゝて、ごた〳〵して居る間に、久子さんの御頭の上を、例の送金機の電線を傳つて、領取書が、ッウ〳〵〳〵と來て、向ふ側に居る番頭さんの頭上に、キチン

と止つたのです、すると久子さんが、

「ア、郵便!?」、「郵便ぢやありません、金庫から受取が來たんてすよ、さうらよく御覽遊ばせ、蜘蛛の巣の様な電線を傳はつて、お金と、受取が、彼方此方往復して居るではありませんか、」

「ほんとにさうね、」

「巴里には在りませんか、日本では、三越ばかりでなく、白木屋なんどにもあるさうですよ、」

「左様ですか、」

「巴里あたりにないとすると、これは何所から、流行して來たのでしょう、」

「大方米國からでしょう、彼地は電氣工學が非常に盛んださうてすから……、」

「マア!!、」

久子さんは、日本に送金機の在るのに驚かれ、私はまた、佛國に送金機のないといふのに驚いたのです、尤も最近に歸朝した人の話に依りますと、巴里にも、全く無い事はないさうですが、長く居らした久子さんが御存じない位だとすると、兎に角、巴里では、あんまり普通のものてはないのでしょう、まして況んや、露西亞をやでしょう、

それから、今度は、久子さんの夏の、御紋附が御入用との事で、

「地合は霞絽、色は錆深川、」

と極つたのです、

扨、御紋附を注文して居る所へ、先刻捜しても無かつた、絽の浴衣地を持つて參りましたが、もうチャンと着物の様に仕立上つて居て、水面に墨繪の鯉が躍り上つて居るのが、如何にも、あつさりと、筆の勢も凡ならず出來て居るので、早速今度は、斯様の圖案にして、數枚御注文になつた様てした、

やがて、御母堂が、今の紋附に相應ふ様な、半襟も求めておかねばと被仰つたの

で、今度は、小物の在る所へゆき、久子さんと御母堂と二人で、あれやこれや、撰つて御出になる間に、私は、其隣の、帶止の在る所へ行つて、こゝへ來た紀念に、一ッおごつたのです、神代杉の箱に入れて在つて、表面には「新意匠あたりじめ」として在るなどは、一寸氣が利いて居る樣ですが、中に私の事ですから、ほんの御粗末千萬なもの……、

かれこれして居る間に、日も追々傾いて來ましたので、本野さんが、今晩は○○伯爵家の晩餐會に往かねばならぬから、買物には又來る事に仕樣と被仰つたので、惜しき二階の花園を見殘して、再び三階の竹林中へ戻つたのです、さて、二階の縱覽であんまり疲れましたから、大きな案樂椅子へ、御母堂が先づ腰をお卸しになる、續いて、久子さんも、私も、みんなで同じ椅子に、一緒にかけて休息したのですが、此時、私は、先刻求めた帶止を取り出して、

「私も一ッ大ふんぱつで求めて參りましたよ、」

と、いつて、久子さんに御目にかけますと、

「まあ一寸おもひつきネ、何程？、」

「あて、御覽遊ばせ、」

「○十△錢位？、」

「おまけ申しておきましよう、オホ、……、たつた○十錢！」

「まあお安い事、」

「どうせ、私の事ですから、」

「それに止め金には、阿方の御友達の、達磨さんが着いて居て、恰度よいのネ、」

「達磨樣でも、お釋迦樣でも、銅ではどうもネ……、」

これを聞いて居らした御母堂が、

「どれ〳〵私にも御見せ！、」

「どうぞ御覽下さい、」

「成る程、止め金がよい、勿論紐もよいが、このまた達磨さんの形狀がなか〳〵おもひつきです、」

イヤハヤ、安物の帶止が、とんだ評判になつたものです、

其内久子さんが、例の壁際に寄せて在る、鹿の皮の椅子に正札が下つて居るのを見つけて、

「アヽあれは賣物ですネ、」

「左樣ですネ、なあに、もしも札が附いて居らないでも、此部屋に在る外の物にしても、御所望なら、みんな賣るのでしよう、」

此時此際向ふで此話を聞いて居られた高柳さんが、

「これも賣物です！」

と、頗る滑稽な顏をして、自分自身を指されたのは、時にとつてなか〳〵の御愛嬌!!、高柳（陶造）さんは、久しく米國へ往つて居られた方ださうですが、昨年以來、三越の通譯員になつて居られるとの事、

本野さんは、三越から歸途、直に〇〇家へ御出にならうといふので、先刻御求めになつた、松葉織の帶を、締めて居らしつたヘこ帶と御取替になつたのですが、此際に、ガチャンと卓子上にお置きになつたのは、御秘藏の御粗末な銀側時計、というては、失禮に當るか知れませんが、何しろ、七十フラン（三十圓ばかり）といふ代物で、十數年前に御求めになつたのを、平氣で用ゐて居らつしやるのですから、まあ、現今の御身分に對して、御粗末と申上げて、格別御異存はあるまいとおもふのです、今日、午頃、御屋敷を出がけに、私は此時計を「外交官樣には不似合だ」というて、しきりに不審がつて眺めて居りましたら、

「外交官だからといつて、必ずしも贅澤な物を用ゐねばならぬといふ事はありません、此時計は、なか〳〵狂はなくつてよい時計です……尤も、通譯官でも入用な外交官樣は別ですが……、」

と、一拶參つたのを、意趣におもうて、敢へて、こんな素破抜をいふ譯ではありませんが、總てに於て、本野家の御家風が、質素な御流儀ですから、自然本野さんも、無頓着て居らつしやるでしよう、曾て、馳け出しの外交官殿が、巴里で六十フランの杖を買つて、本野さんに叱られた事が在るさうてですが、ステッキなども、本野さんのは、十フランかそこらの、極ざつとしたものださうです、隨つて久子さんなども、「到底他の大國の外交官さんと張合つても駄目ですから、まあまあ禮を缺かぬ丈てやつて居ります」などゝ、話して居らした事も在つた樣におもひます、

其内、また〳〵「アイスクリーム」やら、他の御菓子やらが出ましたので、一同おなじ卓子に倚りましたが、私が、

「こゝては、特別來賓でなくても、普通客でも、茶菓を喰べて休憩が出來るさうですから、いたづら者の書生連などは、休んだ上に、電話まて應用する事が在る相ですよ、」

と云ひますと、本野さんが、

「巴里でも「ルーブル」や「ボンマルシエー」あたりになると、店も露店よりは數層廣大な組織になつて居て、其上、新聞雜誌縱覽室もあれば、通信室も在りますから、途中で起つた俄の用事や、秘密の通信などを、其所へ寄つて書く者があるさうてす、」

「秘密の通信？」とは妙な事が在るものだ、と私が小首を傾けて居りますと、本野さんがしきりに笑つて居らつしやるので、私も笑つて、その通信の追求は止めたのです、

御母堂は、

「併し、越後屋時代の薄暗い土藏造りに比ぶれば、實に〳〵魂消げる程立派になつたものだ、」

というてさも今昔の感に堪へぬ顔容（かぱつき）で居らせられる、さても、人のおもひは様々なれや、」

久子さんに、三越店に就いて大體の御感想を伺ひますと、「まあ圖案などに一番骨を折つて居る様におもはれる、」との事でした、

私は又、竹の間の壁を再びよく〳〵眺めますと、どうも、下部の煤竹と上部の絹地に調和が缺けて居る様におもはれまして、遺憾な氣持が致しました、もしもあの竹を、唯々、竪に羅列せずに、網代にでも組んだらもう少し落ちつきが出は爲まいかと思ひましたが、これも、或は素人考へかも知れません、私が曾て見ました珍らしい壁の中では、子供の時に〇〇家の珊瑚樹壁（枝さんごのすり込み）の御茶席を拜見しましたのと、京都で螺鈿の壁を見ましたのと、それから近來淺草今戸の某寺で、名左官、伊豆の長八の、鏝繪の四君子の壁を見たのですが、長八は、もう世に殘（な）き人として已を得ぬとしても、その息子とか、弟子とかいふ者が、居るとの事ですから、螺鈿か、若くは鏝細工を、暖爐の周圍あたりに應用する事は出來ないでしようか、どうも、暖爐の上部に茅葺屋根の模型では、どうやら、直ぐに火が燃移りそうな感じがせらるゝのです、店を出てから、呉服橋の所で、私は本野さんの馬車を降りそれから、電車に乘つて、小石川の寄寓所（やどゝころ）へ歸つた頃には、もう町には、燈火がちらほら見えて居りました、最後に本野さん御夫婦をはじめ、三越店並に店員諸氏に向つて、私の見聞に誤謬が多かつたら、改めて御詫をせねばなりません……、」（明治四十一年）

戸籍調査

時は九月の末つ方、彼岸日和の、極生溫い日の午後で在つた、眠るともなく、醒めるともなく、つひうと〳〵として横になつて居ると、ヒョッコリ、下婢が顔を出して、

「あのう、巡査が參りました、」

と、少しく慄え聲、正直者の下婢は、警官といへば、もう閻魔様の御代官とでも心得て居るらしい、自分は「なんの〳〵、人民保護の重寶な御役人様、此方に罪悪さへ犯して居ねば、何の事はない、」と思つたが、併し、其實、此うらゝかな好日和に、警官などゝいふ、風流らしくない人物と談話をするのは、あまり好ましくなかつたのだが、已むを得ず、出て逢つた、

「住職は居らんか、今は御前ばかりか？、」

御役人様は、威猛高に仰せらるゝのである、

「へェ〳〵、此寺には、住職も家族も誰も居りませんので、數年以來の明き寺の荒れ寺で御座りまする、」

「すると、御前は内の者ではないか、」

と、御役人様は少しく御不平の御模様である、

「へェ、私は少しく身體の工合が悪いので、此所の暖地で在るのを幸ひ、保養かたゞ、つひ此明き寺の留守番を致して居りますので、へェ、」

「何！、保養？、保養なら、もう少し便利な所に居るがよさそうなものだが……、」

「イヤ、もと〳〵、如此、不便の土地と心得て參りましたのでは御座りませんが、始め手紙の上で決めまして、參つて見たら此始末、併し、縁ある土地と思つて、かうやつて暮して居りまする、」

「何を、職業として居る？、」

「無職！、」

平生は深山の竹の節穴に籠つて居て、氣の向く時は、御江戸へ出かけて、調子はづれの横笛を吹奏して、都の知己を聾殺するとも、何とも云はなかつた、

「そして收入は？、」

「別段、これぞといふ收入も御座りませんので、唯二三の親族の者の恩惠に依つ

て、かくは生き永らへて居りまする、！」

「何故、寄留屆を出さぬのだ、」

「實は、東京へ往つたり來たり、氣分次第、ぶら〳〵して居りまするものから、つひその、……尤も、其事は、前の御同役様、並に、役場の方にも御含み置きを願つて置きました様の次第て、」

「本籍は何所だ、」

「へエ〳〵、前の御同役様にもはや申上げておきました筈て御座りまするが、」

「何遍聞かうとも、此方に職權があるぞッ！、」

イヤハヤ、大變な御職權の御威光て在ると、氣の弱い本人は、縮み上つて恐入つて居ると、突然、

「出齒庖丁を借せ！、」

との御嚴なる御下命て在る、

「ハッ、」

と、いうては見たものゝ、もしも、凶器が御入用ならば、御腰の佩劍て御用は足り相なもの、何の爲に、出齒庖丁を御召しになるぞと、一寸、不審に思つたのであるが、併し、此場合、御命令に背いて、どんな事にならうとも解らないから、謹んて、下婢をしてこれを捧げしむると、御役人様は、靜かに、ポケットから鉛筆を取り出し、庖丁もて之を削り給ふのて在る、

成る程、此、御方様は、如斯場合には、常に小刀を用ゐずして、出齒を用ゐらるゝのである事が、始めて合點せられた、

「一體全體御前は何所の者て在る！、」

「へエ〳〵、本籍の御座りまするのは、天竺縣、震旦郡、唐人町、木股猿助方に御座りまする、」

「そして、御前は猿助の何に當つて居るのだ？、」

と、怪しい御眼光がピカリ！、」

「猿助の娘に御座りまする、一度他家へ參りましたが、只今は、親里に同居になつて居りまするので、」

「それでは、御前は離縁されたのだな、」

「これは又滅想な、親の内に居れば、直に離縁されたのだらうとは、おなさけない仰せて在る、」と口まで出たが、待てしばし、こんな時には、事情をよく言上仕るに如かずと、強ひて胸なでおろし、

「イエ〳〵、どう仕りまして、離縁ては御座りませんが、夫が沒しまして、子供もなく、天上天下に、自分獨りて御座りまするから、つひその、戸籍丈同居さしてもらつて居りまするので、」

財産も、家倉も無いからと、云はうとしたが、多分賢命なる御役人様は、其邊の事は、御洞察下さるだらうと、差控へたのである、

「して御前の名は、」

「竹野節子と申します、」

もとより直情徑行、世を婉曲に渡る法を知らざる大阿呆と、註が加へたかつた、

「これなる者は何者かッ！、」

と、傍らの少女を、顎て御指しになるので在る、

「それは下婢て御座りまする、」

「フム、」

妹ても、娘ても無かつたかと怪玄な御顔容て居らせらるゝ、

「併し、かく一家を構へて居る以上は、直ぐに寄留届を出す様に、」

「それも、如何致せばよろしきやと、始めから躊躇致して居りまする、と申すは、前申上げます通り、此地にばかりは居らず、始終東京の方へも出かけまするものて御座りまするから、」

「然らば、東京と、此地と、何れに多く住居する？、」
「何分、氣候と、身體の工合ひに依りまして、進退致しまするから、確かと何方とも申上げ兼ねまするので、」
御役人様は、益々不興の體で在る、
「併し、此地に寄留のないのは大に不都合で、もしも、明日にも傳染病にても罹れば、早速、村人の厄介にならねばならぬぢやないかッ！、」
これはしたり、私達の影はよほど薄いと見えて、明日にも傳染病に取りつかるゝと御認めらしい、おなさけない次第で在る、
「突然、急激な傳染病に罹りますれば兎も角、普通の容體で、重態に陥りますれば、東京へ歸るか、さもなければ、入院でも致しますつもりで御座りまするから、」
「併し、下女迄連れて行くのではあるまい、一家の在る以上は……、」
「イヤ、私は虚弱の質で御座りますから、平生でも、進退には必ず下婢を召し連れまするので、」
「そんなら、此家は明き家にして行くのか、」
「勿論の事で御座りまする、あとは、近隣の者が、保護致してくれまする、」
御役人様は、ます〳〵衣體の分らぬ奴と思召したらしい、此方もせめて、蝸牛ならば、何んとか申上げたいのだが、家殼も持たぬ蛞蝓で在つて見れば　大きな口もきけず、悄然として居ると、
「家の管理人は誰だ、」
「寺の檀中の者、」
「住職名義は？、」
「隣村の清澄寺様の御兼務とやら申す事で、」
清澄寺と云へば、この邊の中本山、其寺の大和尚が、こんな住人のない、小さい

荒寺の兼務住職だとは、役人様ならずとも、誰でも不審に思ふ所であらう、

「清澄寺！、本當か？、」

「左様に聞き及んで居りまする、」

尋問は一應これで濟んだが、聞けば聞く程、不思議な人間が、不思議な寺に住んでゐるものぞと思召してか、御役人様は、小首を傾けつゝ御かへりになつた、後では、裏の柿の木で、百舌がしきりに鳴いて居る、（明治四十一年）

三保の春 上

去年の暮より、ふと立ち寄りて清水を結ぶ假の庵、樵夫の小屋とも見ゆらむ荒れ寺なれど、さるにても、住めば住みよき我ユートピヤ！、名にし負ふ清見潟の片山里なれば、みどりなす三保が崎も、白妙の富士の高根も、たゞ軒端ばかりのながめとなしつ、霓裳羽衣の曲を松風にきゝ、圓かなる月かげに天女の行衛を憧ふ、

さりや、いかて此住居、塵の世の人に見出てられじとひたしのびに潜ぶ、

年立ちかへりては、こゝは暖國の、はやくも野山に春の色見えて、菜の花も遠近に咲きこぼれ、梅が枝も、えならぬ香氣を世捨人に送る、かくてぞ、我も頻なき春のあけぼのに、都にかへらむ事を忘れ果つべうぞ覺えし、

二月の始めばかりかとよ、庵の枝折戸に、人の訪ふ聲す、見れば鬚いかめしき獵男の立たずめるなりけり、なじみあるネロ（獵犬）は、我姿を見るや直に尾を掉りつゝ寄り來る、

○「マア一雄さん、どうしてオ出！、」

一「どうしても、かうしてもない、ひどひ、また、奥山に引込んだものですナ、此村へ來てから、二時間も探して、やつと探し當てたのですよ、……やれ〳〵疲勞れた、」

○「無理に、探して下さらなくてもよいのに、」

一「母上が、是非オ尋ねする樣に云はれたから、獵の序に仕方なしサ、無論、今夜は泊めてもらうつもりですよ、」

○「オ泊りになつても、麥飯に、山の芋の外は、何もありませんよ、」

一「後から從者が、飲食物を悉皆持つて來ますから、只、家根裏丈貸して戴けばよいのです、外に母上が阿方によこされた、オ土產の御菓子も澤山ありますし、ボルドオの葡萄酒も持つて來ましたよ、」

○「マア、母上からの贈り物をえさに、押しかけオ客とは驚き入りましたネ、」

一「グヅ〳〵云はずと、もう觀念して、歡迎準備の爲に、風呂でも湧て給へ、湧て給へ、」

○「丁度、今日は寒いからッて、橙湯がたて〻ありますよ、」

一「そんなら早速湯へ這入つて足を洗ひますから、浴衣を貸して下さい、」

○「そんな貸し浴衣なんて用意してあるものですか、其所邊にタオルがあるから、持つてオ出でなさい、」

一「情けない宿屋だナア、……」

やがて、主客打ちくつろぎつゝ、晩餐の膳に向はんとする程に、戸外に俥の音のするよとおもへば、

おさん「アノ、中有の若樣がオ出てになりました、」

○「何？若樣だつて、今日は何んといふ厄日だらう、みんなに押し掛けられてサ、」

若「叔母さん今日は！、田舍だとは聞いて居ましたが、山で、里で、海で、總てのコントラヂクションを備へた妙な所ですなア！、」

○「困るネ、貴方達は、あんなに來ては不可いつて云うて上げたのに！、」

若「だから、參りましたのサ、僕に許り來るなつて云うて、奥にはすでに、誰か來て居るではありませんか、」

一「ヤア、若樣奇遇だネ、今日は中有から、舞ひ下りかネ、」

若「オヽ、一雄君か、之は珍らしい、」

○「貴方達そんなに シラバクレて、かねて約束して同時に突貫したのでしよう？、」

若「そんな事が在るものか、ネー君？、」

一「勿論！、君には、僕は洋行前に逢つたさり、隨分久しぶりだネ、」

若「君は、しかし、ひどいネ、僕に默つて叔母の所へ先きに押しかけるなんて、」

一「馬鹿を云ひ給へ、僕は叔母上に對しては、少くとも、君よりは優先權があるつもりだが、」

若「それは又何故？、」

一「何故つて、考へても見給へ、僕は佛國滯在中、叔母上に代つて叔父上の末期の水を汲んだではないか、」

若「それはそうだけれど、僕は叔母さんとは、血を分けぬ許り、四歳の時から懷かれたり、オブサッたりして育つたので、單に君等の樣な、中年者とは大に關係が異ふからナ、」

一「けれど君は、叔母上には、いつも〳〵世話許りやかせて、何一ッ勳功をたてやしないぢやないか、そんな優先權なんて、遠に時效にかゝつて消滅して居るサ、」

若「君は、洋行してヘンに理屈ッポクなつたネ、」

一「ナアーニ、理屈でも何でもない、君が喧嘩をふきかけるから、仕方なしの辯駁サ、アハ……、」

○「サア〳〵、貴方達、偶々逢つて、互に理屈の揑ね合ひは止して、昔の仲よしのオ友達になつて、早く御飯でも召上れな、オ汁が冷めて仕舞ふではありませんか、」

一「けれど、おもへば旅などへ出かけて見ると、しみ〳〵人情の厚薄が解るネ、僕も長い間外國に居つたが、隨分笑つたり、仲よく話したりする友達は、澤山居つ

たが、さて〳〵、顔を見て直ぐに喧嘩を吹きかけられる樣な友人は、一人も出來なかつたからなァ……、今日、君に逢つたのは、しみ〴〵嬉しく思ふよ、」

若「今度は、ヘンに人情ッポクなつたネ、」

一「實際君などは、まだ兩親の傍に居て、何不自由ない身の上だから、世態人情などはよく解るまいが、よーく、世間では、子を持つて知る親の恩なぞと云ふが、僕は長く外國に居たばかりに、子を持たない內に、すでに親の恩を知る事が出來たよ、こゝの叔母上なども、逢へば小憎らしい皮肉許りいはれるから、有り難くもおもはんが、それでも、旅へ出て見ると、小言を云はれる人がなか〳〵懷しいものだよ、」

若「君は、全く人格が一變したネ、アノ駄々ッ子のハイカラ坊チャンの口から、人情論などを聞かうとは、夢にもおもはなかつた、僕もそんなら、今年は奮發して洋行でもするかナ、」

○「若しも、中有さんに親の恩が解る時代などが在つたら、太陽が西から出ましようよ、」

若「僕は、今だつて大に親孝行を爲て居るのだが、到底、大孝と小孝との分際などは、舊世紀の、而かも、叔母樣の樣な凡庸な頭腦(あたま)には解らんサ、ネー君、」

一「ハ、……大に左樣かも知れない、」

かくも、互にへだてなく談話(かたら)ふ所へ、次の間より顏を出したるは、下婢なりけり、おさん「アノ村長樣の御宅から、オ使が參りまして、御馳走を持つて參りました、」

○「よろしく申上げて、此所へ持つてお出でよ、」

一「ソーラ見給へ、僕等が來た許りに、阿方も御馳走にありついたぢやありませんか、」

若「何んてす、ヤア、鷄のカッレッに、茶わんむし、洒落たものを持つて來たナ、」

一「村長先生、案外氣がきいて居るネ、」

若「奏任官にも特選してやり給へ、」

○「オホ……、生憎、此頃、村長樣は不在だけれど、令閨が女學校の出身て、御料理がオ得意、そして御老母は私とはオ念佛の友達だから、俄のオ客で困るだらうとおもつて下さつたのでしようよ、……山處てはこんなものより外、仕方がないからネ、」

若「一雄君御持參のオ江戸の辨松の御馳走もあるし、今日は、實際、意外な豐饗な、サツパーだナ、道理でしきりに、來たい心持がした、」

○「サア〳〵、早く喰べましよう、そして、御飯がすんだら、香茶とクロツカントよ、」

若「クロツカント？、」

○「巴里のオ菓子だとサ、」

一「ナアニ、煎餅みたいなほんの駄菓子だよ、」

若「そして食後には、叔母樣の所へ來た、年始狀の點檢でも仕樣ぢやないか、」

一「それは、大に面白からう、此所にはビーヤールもなし、食後の遊び樣がないからな、」

若「オイ〳〵、氣樂を云つては困るぜ、コンナ山家に、玉突なんかゞ在つて、おたまりこぼしがあるものか、」

一「大にそうだナア、」

若「明日は滯在して、君のオ土產話だよ、」

一「佛蘭西のコンコルダーの話でも聞かさうかナ、」

○「コンコルダーつて何？、」

一「加特力敎は、警察法に從ふ限り佛國に於て公認敎たる事や、大僧正は政府の任命する所だが、宗敎上の職權は、羅馬法皇の許可に出て、而も大僧正は、政府

に忠實の誓を爲すと同時に、相當の俸給を政府より受くる事など、つまり佛國の政敎問題に關した、條約みたいな、妙チキリンなイキサツさ、」

若「それは大に有り難いネ、」

一「君も、近來は大に文學的方面に發展したらう、チト、オ得意の三十一文字てもきかせ給へナ、」

若「何、一向駄目だよ、」

一「一寸、即席に何か一ッやつて見給へナ、」

若「そうさネ、

巴里通と氣取つて見ても自ら
訛り言葉にォ里知らるゝ、」

一「そんなのなら、吾輩にも出來るサ、

若樣は優にやさしくおはせども
無藝無能と開くぞうたてき、」

若「これは御挨拶だ、序に叔母樣にも一句、進上しようか、

浮世をば離れがたなの病み上手
死にそこないの婆々のさへずり、

皆々「ハヽ……、ホヽ……、」

此時まで眞面目に給仕の役をつとめし下婢の、何を感じてか、おさん「若樣、どうぞ、私にも一ッお歌を戴かせて下さいませ、」

若「馬鹿ナー、惡口だぞ、いゝか、」

さん「何でも、よろしう御座います、」

若「そんなら、

今日もまた水仕仕事に日は暮れて
夜舟こぎつゝ小言頂戴、」

さん「有り難う御座います、」

○「ォ前解るのか、」

さん「分りませんけれど、有り難う御座います、」

一「妙なおさんも在つたものだネ、」

若「類は友で、叔母さん所の下女は、いつも奇人許りが來るんだからなァ……貴様また牛の玉子が見たいなんて云ひだすのだらう、」

さん「それは、前の人だそうで、」

○「どうして、今のおさんはなか〳〵の批評家で、坊さん方のォ酒を召し上るのは、佛敎のつぶれる徵候でしようかなんて、聞くんだからネ、」

若「何故、ォ前はそんな事を聞くのだ、」

さん「へ、……、」

○「默つて居ないで、何とか御返事申上げナ、」

さん「でも、耶蘇の方は一向ォ酒なんぞを召上らぬ樣ですから、」

一「吾輩は、酒を飲んでも、坊主ではないから、大丈夫だぞ、」

若「己は、一向、酒を飲まぬてはないか、」

さん「貴方樣方は、左樣で入らつしやいますけれど、」

若「そんなら、誰の事を云ふのだ、」

さん「オホ……、」

若「誰だと云ふにサ、」

さん「國の私共の檀那寺のォ坊さんが、不斷にォ酒を飲みます人で、度々檀家に無心などを申しますのを聞きましたものだから、つひそんな事をおもひましたので、全く東京あたりなぞの方の事を申上げたのでは御座いませんから、どうぞ御免遊ばしませ、」

若「ウ、、貴樣の云ふ事は、全く尤もだ、」

一「イヤ、地方では、左樣云ふ事も在るだラウからナ、」

若「人の模範となるべき僧侶が、かゝる下女輩にまで品隲される樣では、實際困るナア、」

さん「つひ申上げましたので、どうか御勘辨遊ばして、」

若「ナニ謝罪るには及ばん〳〵、」

○「モウ善いから、サッサと、御膳をお下げよ、」

さん「御免遊ばしませ、」（明治四十年）

三保の春 中

やう〳〵食事も濟みはて、再び座を改め、茶器菓子器などのはこばれしほどに、

若「サア、これから香茶を飲みつゝ月夜の品定めだ、」

一「何んだつて、」

若「それだから、君の樣に文學趣味のない唐變木は困るね、「源氏物語」箒木の卷に、雨夜の品定めといふ、艶なる一段があるのサ、」

一「吾輩は、稗史小說なんて一向讀んだ事はないからナ、」

若「君も、交際場裏に立つて、貴婦人連を相手にする事も有るだらうが、「源氏」や、「狹衣」のテクニック位は知らんと、赤耻をかく事が在るよ、其所へゆくと、末松博士などはえらいものだナア、僕は、博士の「夏の夢」、「日本の面影」を讀んで、氏の博學多才なるには、實に感心して仕まつた、文學でも、美術でも、何でもかでも知らぬ事はないのだからなア、」

一「專門意外の事は、耻にして耻にあらずサ、吾輩は末松さんは、文學博士として其黽勉の根氣のよいのには感心するが、氏の政治的手腕に至つては、大に推尊する事は出來ないからネ、……横道の話はよして、その品定めとやらを始めんかネ、」

若「大に仕様かネ……、エート最初に槍玉に上るのは、誰のだらうナ、」

賀正……當方三十九年も借金の申譯にのみ相送り、新年を迎へても、元日早々より金ばなしに奔走の已むを得ざる境界に御座候、御心柄より出來候とて、何方へオ尻を持ち込む譯にも行かず、されば今の所、オ正月も、節期も、唯金の在否に依りて相定められ候、イヤハヤ……、」

丁未正月　欠伸迂生

一「欠伸さんテ、大金持の若旦那ぢやありませんか、」

○「それがね、貴方は日本に御不在で御存じなかつたけれど、先年父上が急死されてから、欠伸さんは書生上りで何も解らず、番頭や、親類に、善い様にされて、數十萬圓の身代も、近々數年の間に丸てメチャ〳〵よ、今日、こんな手紙を手にしても全く夢の様ですよ、」

一「つまり、祖先の遺産に座食する弊から起つて來たんてしよう、」

○「それも在りますが、澤山の身代を、何んでも主人一人のドグマで支配して居て、頓死されたからですよ、」

一「オ母様は、どうされたのです、」

○「ナアニ、國あたりの風習では、大家の令閨なんて、内の身代がどの位あるやら、如何なつて居るやら、少ッとも知らず、唯喰べて、着て、安樂に暮してゆけば、それて濟むのですからネ、」

一「東京だつて、貴族や金持の奥様方は、大低そんなものでしよう、」

○「主人が死んでも、遺族が衣食に困らない様な、何とかよい工夫はありますまいか、つまり、華族様方の、世襲財産の様な工合にネ、」

一「無い事も在りますまいが「すべてが、惰力でやつて行く風習を一掃して仕舞はなければネ……、」

若「其邊の事を研究するのが君等の役目だぜ、單に増税許りが、政府の能でもな

からうサ、」

一「吾輩は、そのみちの役人ではないから、其責には任ぜんが、マア大に考究して見ましようよ、」

若「次は、誰だ逸民君か、相變らず突飛な通信だらうナ、」

恭賀新年、御無沙汰大博士の稱號實に空しからず、我身て我身をあきるゝ計り、……當地今正に四面銀世界の光景、殊に嚢中無一物と來ては、好きな酒も甘からず、……極めて單調なる鄉里の小天地に避在しては、複雜小生の如きは、到底身を容るゝの地なき感あり、……愚妻の如きは、春大の臂を控へて能く働き居れり、雨と降る大言小言も馬耳東風ときゝ流す、彼女も亦豪ケッなるかな、例の一作も一向ラチ明かず、到底花咲く春の在るべき見込みなき今の境界、……庵（暗？）主さん！、助け—船！、

未の元旦　半山逸民拜

一「オヤ〳〵、半山君は阿方に對して、僕がついて居るから大丈夫、大船に乘つたつもりて、安心して居ろなんて云はれた方ではありませんか、」

○「暴風雨の時には、大船でも、何んでも、一向當になりませんものでネ、おまけに、坐礁でも爲て御覽なさい、共に沈沒サアナア、」

若「ソラ御覽なさい、僕許りに小言を仰言るけれど、阿方の兄弟分は、みんな浮波々々然として居るぢやありませんか、」

一「それは、全く禪尼さんの、前生の因緣の惡い爲だらうナ、」

○「前生は惡くても、未來は必ず極樂往生疑ひなしさネ、」

一「なか〳〵、それも怪しいものだテ、」

若「次は誰だか、清國の消印だよ、」

謹賀……平和克復後の今日も、○○○○○と、事務整理とは、やはり我等をしてのべつ幕なしの仕事に從事せしめ、全く、

ねるまのみ人にかはらぬ思出を
　浮世にかへす曉の鐘、

です、併し忙殺せらるゝは、閑居して不善を爲すよりは其身を害する事少かる可く、……滿洲へ來て、戰爭當時の話をきゝますと、人間は、困苦缺乏に堪ふる感念と、熱心に堅き心を持つてやつたなら、如何なる事業も、出來得ない事はないと思ひ知られます、

　雨そゝぐ軒のした石くぼみけり
　　難き業とて思ひすてめや、

それに、もう一ッ必要なのは計劃ですネ、冷靜なる頭腦と、周到なる注意とを以て、豫め劃策する！、之は作戰の第一義とも可申、民間に於ては、計劃には餘り重きを置かん傾向が有りますが、……小生も歸休後は大に父の事業を助けて、不撓の精神を以て奮鬪するつもりです、……當地は元來雨の少い所で、毎日晴朗なる天氣がつゞき、雪もなく、頗る好日和ですが、併し、さすが滿洲丈けありて、寒風强く、朝は、攝氏零以下二十五六度に至り、正午にても零以下十七八度、……日本の暖地で、正月に梅見をする樣な呑氣な連中には、到底想像もつきますまい、昨日は、葡萄酒の氷結したのを、長官よりもらひ受け、新聞紙に包んで持ち歸り、鍋で沸かして飲みました、

光緒三十三年　　滿洲〇〇〇にて　　志願兵拜

一「誰樣(どなた)です、」

○「ナアニ、從弟ですがネ、」

若「實際、あの人の爲には志願兵に出たのは、非常に有益になりましたネ、」

○「全くですよ、今迄艱難も苦勞もせずに、ハッペリ育つて、學校を卒業した丈ですからネ、一體、志願兵に出すときには、叔母などは大事な一人息子が、馬の

掃除番までして、もしや嚙みつかれる様な事でも有つたなら、可愛想だなどゝ云うて、くだらぬ心配までして居ましたが、其所はさすが叔父ですネ、兵隊に出るのは、昔なら二本指しの武士にオ取立にあづかる様なものだから、一門の名譽だなんて申しましてネ、まだ、徵兵猶豫の年限は有つたのですけれど、無理に志願をさせたのですからネ、」

若「實際アノ叔父さんは、非凡い所が有るよ、民間草莽に隱れて居るからだけれど、立派に良二千石以上の手腕が有るネ、」

○「腕一本でアレ丈の身代に仕上げて、而かも自ら奉ずる事至つて薄く、社會鄕黨の爲めのみに盡すといふ人はあまりありますまいョ、」

一「禪尼さんの叔父さんにも、そんなえらい人があるんだから、世は不思議さネ、」

若「ナーニ、叔母樣の叔父さんぢや無い、故叔父さんのまた、その大叔父さんョ、」

○「マア、ひどい事を仰言る、」

若「大叔父さんから、來た手紙はありせんか、」

○「やはり、其所邊に、一所に束ねて在るでしよう、」

若「あつた〳〵、」

……優勝劣敗の、今後益急なるべきは大勢の然らしむる所、之なくば、世は文明の位置に進むの時なかるべし、兼ねて御話し申候通り、爾後十年の變化發達は、定めしみものならむ、此活芝居を見ずして、淨土行を急くなどゝは、如何にも沒趣味なり、無風流なり、……心長閑に御加養あり度候……的例は實驗されたり、多くの財を保つの人格技量なく、又は土地を有するの器に非ざる人は何時か其位置を失ふ事あるべしと、曾て斷言したりしが、〇〇家も△△家も、其他誰彼となく、續々破産者を目擊する近來頻りなり、一子相續法は律令を以て遠からず改正とならむ事を祈候……社會を根抵より改造せんには、其變化の順序、穩に行くか、悲慘に行くかは問題なれど、……我大和民族は、總て

の事に成し能はざるの民族に非ずと思はる、但、人類は急に進化上達するものに非ず、人々各々自信力を把持して進まんには、今日は實に好機會なり、……眼前の小利害と小事情の爲に、成し得らるゝ事を躊躇するは、愚の至りならずや、……天下を談じ國家を語り、將た宗教を談ずるに當つては、親族に全く其人なく、鄉黨また知己を缺く、夏期に相成候はゞ、御誘合せ御來遊奉待候、

吹雪積む越の野中の冬籠り
長閑けき春の來る日をぞおもふ、

歌になるかならぬか解らねど、思ひしまゝを書きつけ候、

炬達の中にて認む、

芳潤老爺より

一「成る程、老人としては、なか〳〵面白い手紙を書かるゝが、もう幾歳位の方てす、」

○「多分、今年が還暦位でしようョ、」

若「逢つて話すと、まだ〳〵面白い話が、口を衝いて出て來るてす、長い病氣で身體は弱つて居らるゝが、素晴しい元氣な老人てすよ、」

○「文は、昔の人て巧くない樣てすが、何かしら、通信を讀みますと、ほんたらに逢つた時の元氣を思ひ出しますよ、」

一「イヤ今の若い者より、舊世紀の老人の方が却つて自信力が強いのに驚くてす……、外に、もう少し理屈を離れた面白いものが、ないかネ、」

若「そんなら、今度は女性のものに仕樣か？、」

一「それ大贊成!!、」

若「ソーラ、女性の第一號だぞ、」

新年御目出度……過日、御二人樣御地へ御越の折は、風ふきすさぶ濱やかたこよなう淋しう思召され、兼ねて、此村に忠義者とて名ある浪人を召し出され

候に、昔の恩義を忘れず、日毎に心づくしの數々、我君様（母様の事よ）にも至極満足に思召され、此度、大將軍御下向につき、その恩賞として、漬物一樽、……ナンテ、本當に、先達は祖母や妹が參りまして大層オ世話になりました、何分別莊もアノ通りの始末ですから、オかげ様で、賑やなオ年越をして、大變喜んで居りました、此度好便につき、御好物の新たくわん少々差上候、番人共の餌食にならぬ内に、早く取りにやつて、召し上れッテ、オ母様の仰せです、……それから此の間、御父様だの、兄様だの、姉様のオ友達だの、私達だの、みんな、無茶苦茶連が寄つて、連歌とか、俳諧とか、何んとか云ふものを、こねましたから、御徒然のオ慰みに、書きつけておきます、いづれ又春永に、……さよなら、

七人に男二人や春の雨
　みかんの皮の盆に一杯、

警察に犬の首輪の値が上り
　うづら五六羽殿の御機嫌、
村時雨山路にかゝる騎馬の衆
　片日の岡に照るや紅葉、
村長の娘の尻の大きくて
　枯木の柳今年めぐみぬ、
狼が時々出てゝ牛を喰ひ
　五匁筒の夜深うなる、
燈明の油の減りのいちじるく
　お化の本場佐夜の中山、
ねむたきは胃病の所業なるやらむ
　試驗のつらさしみ〳〵と知る、

春の夜の夢の庵のつどひかな
　禪を談せず花を談ずる、

都にて　みのむし子より

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

若「くだらない事を、暇にまかせて書きつけたのだネ、」
○「なか〳〵面白いぢやありませんか、親子兄妹集つて連歌に一夜を更かすなんて、今日の華族様としてはまづ上乘の口だワ、」
一「伯爵の別莊が、此邊に出來たんですか、」
○「ハア、高臺でそれは〳〵見晴しの善い所よ、マアダ、御普請中だけれど、明日オ連れ申しましようか、」
一「ハアどうぞ、……それから次のはどうだい、」
若「今度はなか〳〵巧妙な手蹟だよ、」

あたゝかきその懷にいだかれて
　燃ゆるおもひを人は得知らじ、

耶摩子

オ年玉の印までに、右の品御送り申上候、何だか御當ての上、御開き被成度、尙、昨今の寒氣、老が上には、一層御要心いのり入り參らせ候、かしこ、
一「世捨人に贈るには、少し不似合な歌だネ、」
若「ナアーニ、老人に懷爐なんて、最も相應しいではないか、」
一「ウ、、懷爐か、僕はまた何かとおもつた、」
若「其次のも、贈りものゝ添へ狀だよ、」
……此頃の寒さにては、遠からぬ内に冥土へ御旅立と存じ、御餞別の印までに笹飴少々オ目にかけ候、地獄てひどく責めらるゝ時に、少し出して鬼になめさしてオやり被成度、このうつりには、是非〳〵御地の浪の音と、松風のしら

べを、御送り願度候……、

ふみよまん暇だにもたぬ我爲に
しづけくふかき歌うたひませ、

越路にて　新主婦より

一「隨分、頓狂な事を書く婦人も在つたものだナ、」

若「どうして〳〵、叔母様の友達には、まだ〳〵ひどい事を書く連中が澤山あるよ、」

一「あんまり聞きくたびれたから、香茶を一杯飲んでから、次のを聞かう、」

若「サア〳〵、ゆつくりやり給へ、」

一「併し、今のよりひどいといふと、如何樣のだらう、」

若「どんな、こんなつて、追々讀むから、マア聞いて居給へ、」

一「勿論聞いて居るサ、」

若「ソーラよいかへー、讀むゼー、」

今年こそは、極樂より御安着の御報あるべしとおもひきや、未だに道中にぶらつき給ふよし、さて〳〵呆れ果て申候、私事も、ゆきつもどりつ、急ぐ旅にも候はねば、兎角は逡巡を極め居り候、此頃は、當海濱院へ參居り候、新らしき魚に、新しき空氣、これではいよ〳〵極樂の道中手間取れ候事と存ぜられ候、御說諭にまかせ、身に事情ある事を忘れ、日々天下泰平に暮し居り候、精神の修養、靈界の要求などゝいふ事、何の興味も感じ不申、唯々、命の有る間は浮世三分、まゝよ七分にて面白可笑しく暮すが得策と存じ候、煩悶懊惱など噪ぐ連中は、いまだ人世の奥底を去る事遠しと存ぜられ候、さらば御前樣もゆつくり御道中を御續け遊ばせ、御年始ながら　かしこ、

巢鴨式佳人より

一「實にひどいネ、之が女性の手紙だらうか、」

若「ワイニンゲルに云はすれば、無論是等はもはや男性というて然るべき連中だらうよ、……まだあるぜ、」

拜白……病婆將軍閣下にも、流石に失せさせ給はず、配下の一員たる我等にも、新年に繪はがき下賜の榮を賜はり、御仁慈のほど、ひたすら感泣いたし候、……性來遲鈍なる私も、此頃は少々過敏と相成り、やさしくさるれば勿體なく、無情にさるれば悲しく、理屈は充分解り居り候へ共、肉體を持ちし悲さには、將來に希望なき身を以て、徒らに永らへ候は、如何にも腑甲斐なく覺え候、……清澤氏の「懺悔錄」及び、綱島氏の「病間錄」等、御持合せに候はゞ、何卒拜借致度、……オ互に高等寄生蟲も、あまり氣のきいた話では無之と存ぜられ候、

たのみにし人は賴めぬ世の中に
　賴むは法の外なかりけり、

西海の蜑の子より

一「これなどは、案外憐れな音を吹いて居るぢやありませんか、」

○「私達の樣にハンコン洒蛙として不合理宗でも擴張して居ればだけれど、眞面目な人は、長い病氣にかゝると、どうしても厭世的になりますよ、」

一「それを、救つてオやりになつたらよいでしよう、」

○「追々に、極樂へ引張つて行きますよ、」

一「どうだか、地獄の釜底へ友達を敷いて、自分が其上に乘つかるつもりかも知れないネ、」

○「それでも、此世に殘して行くより、いくら親切かも知れませんよ、」

一「厭世的の人間なんて、實際娑婆ふさげだから、阿方が死ぬ時は、束にして一所に引連れてオ出なさいよ、」

○「殉死希望者が澤山在る筈ですから、追つては左樣に致しましよう、」

若「君！、君！、外國から來たのも在るよ、」

一「よし〳〵、」

……末松博士の「夏の夢」に、ゆくりなくも、我姿かゝげられ候より、さま〴〵の評をうけ、誠にはや面はゆく存じまゐらせ候、乍去、かの棍棒大のステッキこそ、その當時、巴里最流行のものにて、嘲笑したまふ方々こそ、世界の流行を知らぬ、……あはれこの事は、云はぬが花にや候はん、……此度娘の寫眞御目にかけ候、やはり母親の血統は爭はれぬものと見え、幼さながら、立派なる天鈿女尊（うづめのみこと）に候、これにても、オ國の祖母樣が、觀音樣へ祈請の結果生れ出でしものよとおもへば、そゞろに、御氣の毒に存ぜられ候、……此手紙多分は新年に入りて屆き可申、さらばこゝに合せて御慶も申述べ候、あなかしこ、

巴里にて　君が友より

若「スルト、今度は御嬢さんが御出來だつたのネ、」

一「丙午の女の子、おまけに巴里生れと來て居ては、將來がおもひやられるネ、」

○「けれど、祖母樣が、今度は是非女の子が生れる樣にッて、清水の觀音樣へ日參をなすつたのだそうだから、いまに如何樣に美しく生ひ立ち給ふかも知れませんよ、」

一「年寄ッて、下らない事に氣を揉んだものだナ、」

若「けれど、其所が大に老人の眞心が現はれて居て、ゆかしいではないか、世の中は、君等の樣に、單に理談一邊で押通しては、無味乾燥になつて面白くないよ、」

○「東西々々、また口論が始つた、やかましいネ、」

若「けれど、一雄さんがあんまり無趣味だから……、」

一「ナアーニ、君があんまりローマンチックだからサ、」

若「モウ分つた〳〵、次のを讀まう、今度は米國からだよ、」

桑港にて　つる子より

……着米當時はクリスマス前の事とて、何くれと取紛れ居り候が、此頃心少し落着き候へば、そゞろに故國なつかしく、御年越にも、オ蕎麥なく、御正月にも雑煮なく、やう〳〵日本町へ參りて、少々の品求め來り候へ共、何となう勝手が違ひ、コボシ、コボシ、しては、夫に叱られ居り候、もう少し言葉にても自由に使へる樣になつたらば、元氣も出づべくやと存じ候が、ホーム、シックとは、かゝるものにやなど、折々は沈思致され候、叔母樣のオ元氣な御手紙拜見致し度と、それのみ待ち暮し居り候……、」

若「外國へ往つて、妻君に不平を幷べられたら、さぞ不愉快だらうナ、」

一「けれど慣れない内は、どうしても、殊に婦人には免れない所だよ、」

若「それは、婦人たるもの、覺悟が足らぬからサ、」

一「覺悟！それは理屈だよ、世の中に理外の理、それが君の平生主張する所ではないか、立派な男子でもホームシックにかゝるからネ、」

若「どうも、女の手紙は憐れなのが多くていけないネ、もつと男性のを讀まうか、」

一「男性でも、女性でも、何でも手當り次第に讀み給へよ、」

若「それぢや、男女連合軍にするよ、」

御年始の印までに、兼ねて御約束の珍桃色の小照一葉、幷に寫眞ブック、一冊御目にかけ候、御批評は御勝手たるべきも、會員兄姉に御披露の節は、夫は、寫眞よりはより多くの威嚴を有し、妻は、尙より多くの柔和なる天成なる事御申添への光榮を得度候、……此頃は、親仁か議會の爲め上京中にて、店用を始め、何やら彼やら、年末歳首は殊に大多忙にて、鬼どんの留守なりとて、洗濯も出來ず、それに、まだなか〳〵「君」「僕」の書生氣質が失せず、前だれ揉手の本能を發揮する事容易ならず、今更ながら、理想と現實との相一致せざる事を悟り申候、先般は高島氏の「理想的商業」御送り下れ、面白く拜見致し候も、相手が田紳で在る以上、此方が理想の商人を氣取る丈け、却つて馬鹿らし

くと存じ候、之には、著者も御同感ならんと存じ候、花菜子のノート料理も、近來はメッキリ上達致し、時々家族に舌鼓を打たせ居り候、其内御品評なから、御出かけ奉待候、

武庫の浦にて　青海漁夫　若菜子　兩人

若「青海兄はよく妻君の事を持ち出す人だネ、」

○「ソリヤー、青海兄は三田出身、若菜さんは目白臺出身で、而かも親が極めた上に、おまけに夫妻相思といふ、極めて御念の入つた夫婦だから、無理もないサ、商賣は理想通りに行かなくても、ホーム丈たは、理想を實現して居るのだからネ、」

若「僕も、近日是非神戸に行く用が在るから、其時は遊びに往つてもよいかネ、」

○「よいとも〳〵、毎日、晩餐後には樂器室で夫婦が合奏するなんて、洒落た事をやつて居られるそうだからね、チット、邪魔をするのも、風流でよいサ、」

一「音樂志想の在る商人なんて、今の日本には一寸珍らしいネ、」

○「なんでも、三田に居る頃、北村季晴先生といふ方に就いて、本式に稽古したのだざうだからね、私も「離れ小島」だの「須磨の浦」だのゝ、獨吟を聞いた事が在るが、なか〳〵カスレが在つて錆た樣な、面白い聲ですよ、」

一「カスレたり、錆たりして居ては、よい聲とは云へんが、兎に角、日夕算籌を事として居るものが、時に優美な音樂に氣を轉ずるなどとは至極よい事だね、從來の商人連の樣に、少しく利益が在ると、直に酒色に耽る樣では、全く賞めた話ではないからネ、」

○「大變な御賛成を得て、青海漁夫、死して餘榮ありと云ふべしですネ、」

若「可愛想に、まだ死なしては氣の毒だから、もう少し生かしておき給へよ、」

一「併し、青春の血潮が冷却すると、其内にはまた趣味も變るだらうから、今の内、大に警告しておき給へ、」

若「君餘計なオ世話を燒かずと、次のをきゝ給へよ、」

いよ〳〵天女の後を慕ひて、三保の松原へ舞ひ下られ候由、さても笑止や、羽衣もたぬ凡下の身の、いかてか、月宮殿に舞ひ上り給ふ事を得べき、……相變らず、御菓子は召し上り給ふや「のう其羽衣は此方のにて候」にてはなく、「のうその羊羹はこなたのにて候」などゝ、仰せられやすべき、羊の年にちなみ、羊かんに胃散を添へて進上致し候、其内、新羽衣物語にてもきかせ給へや……

信仙翁　兩人
よし子

ひつじの正月

若「誰です、」

○「日本橋邊の藥問屋の親仁さんよ、」

若「羊羹に胃散を添へるなんて、よほど親切な老人と見えますネ、」

○「ナァニ、御手のものだから、別に氣の毒がるには及ばぬのですよ、」

若「どうして、叔母さんは御存じないの？、」

○「先年轉地先て知己になり、謠曲を習つたのが緣になつて知つて居るのよ、野暮な親仁さんだけれど、謠曲だけは、梅若の直弟子て、大變上手だつたし、それに、親仁さんに不似合な若い、美しい令閨が居て、其人も可なり謠へるので、毎日習ふより聞く方が却つて面白かつたのよ、其時、「羽衣」を少し許り習つたから、こんな事をいうてよこしたのよ、」

若「すると、此人も、やはり商賣の餘裕を、音樂に利用する仲間かネ、」

一「謠曲は、單なる音樂とは云へんが、まァ何んてもやりさへすればよいサ、」

若「あんまり讀みくたびれたから、チト海岸を散歩して來ませんか？、」

一「まだ、手紙が澤山在るぢやないか、」

若「こんなのは歸つてからでも、明日でも、改めてまた見ればよいてはないか、」

一「清見潟の月夜に、天女にても邂逅すれば、後の世の話の種になるのだらうから、行かうかネ……、」

若「僕が歌枕でも拾つたら、かついでかへり給へよ、」

一「吾輩には、到底そのオ役はつとまらんから、禪尼さんも行きませんか、」
○「私は寒いからよしましよう、」
一「ヂャア、二人で行かうかネ、」
○「ネロ」もつれてオ出でなさいよ、」
一「ハイ〳〵「ネロ」來い！「ネロ」來い!!」
兩人「行つて參ります……、」
おもへば、この若き二人よ、世の表面に立ちては、今ははや、何くれと人にもてはやさるゝ身を持ちながら、我が隱れ家に來りては、さながら竹馬の昔に立ちかへりて、へだてなく語らふ事のいとしさよ、彼等が、生い先き長き行手には、禍神の躍るなかれ、幸福のこぼれよかしなど、老が身のさま〳〵おもひ念じつゝ、いつしかうたゝねの夢に入りぬ、」（明治四十年）

三保の春 下

夢の內に、犬のいたく吠え狂ふよと覺えつゝ、おどろきて眼さむれば、散歩よりかへる二人は、はや我枕頭にあり、
若「叔母さん、御土產を持つて來ましたよ、」
○「何？牡蠣殼でも拾つて來たのですか、」
若「まさか？、それだから、叔母さんは風流韻事を解せぬわからずやだといふのだ、そうら御覽なさい、僕の歌袋はこんなに一杯ぢやありませんか、」
一「イヤハヤ、途々さん〳〵歌袋を背負はされて、吾輩木强漢たるもの、大に閉口して仕舞つた、」
○「どうれ、チット、開けて御覽なさい、」
若「へーよろしいか、そんな寢ぼけ顏をせずと、チャンと起き上り給へナ、」

○「起きて、居ずまゐを直さねば、聞かされぬほどの、上等の歌かネ、」

若「上等だともサ、ソウラ御覽！、」

○

清見潟松原しろく照る月に
　繪筆なき身を我かこつ哉、

○

大空の星のことゞ〳〵歌ありて
　海うつくしや春の夜の月、

○

われとわが愁さながら歌にして
　打ち笑む夕べ月はさやけし、

○「あんまり、自慢ほどにも、ないわネ、」

若「古今の名吟なんて、生涯に一首か二首のものだから、マア、こゝらあたりで、勘辨し給へよ、」

一「途中で、吾輩に對しては、大變な誤自慢をしておきながら、叔母さんには、大分弱い音を吹くネ、」

若「ナアーに、無理が通れば、道理引込むて、叔母さんなどの酷評は、いつものお僻だとおもつて、通しておくのサ、」

一「阿方も人の歌の批評ばかりせんて、チット、御自分でも出品なすつてはどうです、」

○「ソウネ、歌詠みは居ながら、名所を知るといふから、私も何か少しひねり出しましようかネ、」

一「まるで、手品の樣だネ、」

若「サア〳〵皆樣どうぞ手許を氣をつけて御覽じろ、」

○

我胸のふりし小琴も鳴り出てよ
　浪の音わかし春の夜の海、

○

清見潟月かげしろき浪の音に
　今も昔もひゞきをぞきく、

若「拙いネ、すつかり手の内のあらが丸見えだ、」
○「どうも藝當未熟につき、致し方が御座いません、」
若「そんな、懷舊的のではなく、もう少し、陽氣な所をやり給へナ、」
○「困るネ、色々の注文をなすつたつて、手品の種も、今夜は品切れですよ、」
若「品切れの所をやるのが、手品の手品たる所以ではありませんか、」
一「君は、いやに、しつこく追窮するネ、」
若「人の歌に苦情許りつけるから、困らせてやるのサ、」
○「ぢや仕方がない、もう一首限りですよ、」

一灣の月おもしろき夕波や
　時に興ある船うたの聲、

若「もう少し、陽氣な所を、」
○「マア、本當にしつこいネ、エヽまゝよ、」

笑みて唯我も聞くべき春の夜の
　眞砂路白き波のさゝやき、

○「モウ之れて御免よ、さん〳〵人をいぢめた代りに、中有さん、貴方もモー二三首、出品なさいよ、」
若「早速意趣返しか、困らせるなア、」
○「サア早く！、早く！！、」

夢誘ふ理想の國は遠くして
　浪の音ほのかおぼろ夜の海、
若うして春に笑む子の幸知らば
　浪の緒琴よたゞ高う鳴れ、

一「やはり、君は歌の天才だネ、」

若「今度は、いやにおだて出したてはないか、」

一「實際、叔母さんの歌には、餘韻がないが、君の歌には、何ともいへぬ、餘韻を感ずるよ、」

○「一雄さんにも、歌の餘韻なんて、分るのだらうか、」

一「譬喩にも、岡目八目といひますから、詠み人それ自身よりも、吾輩等の様に歌もぬ、たも一向詠めぬもの、方が、よく其の善惡の判斷ができるものですよ、小説などでも、やはり同じ事ですが、作者と、批評家とは、全然分業でせんければ駄目ですからネ、若しも、批評家にして拙い創作をやつて御覽なさい、誰れも、其人の批評に、再び耳を傾けぬ様になりますからネ、」

○「へ……、」

一「近い話が、戸張竹風君ですが、あの男が、單に批評家丈やつて居れば、ビールの氣焔として、兎も角も、人が通してくれますが、其の作物を見ると實にウンザリして仕舞ひますからネ、」

○「近頃何かそんな、拙作しましたかネ、」

一「從來も彼の作に碌なものは無かつた様ですが、今年の新小説の新年號に、「島の聖」といふ、實に拙劣いものが掲げて在りますよ、」

若「君、あれは單に小説として評するのは可愛想だよ、あれは、自分のニーチエズムを發揮すると共に、無我愛一派を悪弄する、諷刺的のものだからネ、」

一「諷刺にしろ、何にしろ、もう少し、氣の利いた書き方が出來やうぢやないか、」

若「君は、稗史小説を讀んだ事がないなどゝ、先刻いうておきながら、今は、大に小説通の様な顔をして、馱法螺を並べるではないか、」

一「そりや「源氏」や「枕の草紙」の様な「ならん」「つらん」の、みゝずのぬたくり文は讀んだ事はないが、當代のものなら、和漢洋何んでも讀破して居るサ！、アハ……、」

若「大に鼻氣息が荒くなつて來たネ、しかし君、「枕の草紙」は小説ぢやない、隨筆だよ、」

一「そうか、そんな事はどうでもよいが、近い話が、一寸マア、モリエルやイブセンのものを覗いて見ても、深酷な諷刺の中に、何とも云へぬ妙味を感ずるではないか、」

○「大變な、御議論が始りましたネ、……けれど、もう今夜は大分おそいから、寢やうぢやありませんか、」

一「山中暦日なしといふから、おそいのはやいのといはず、時間と空間とを超越して感興にまかせて、語り明さうぢやありませんか、」

若「實際叔母さんの様な、如斯、氣隨氣樂な生活をして居るものは、世の中に何人もありますまいネ、少慾知足いふ言葉が在るが、マア叔母さんなどのは變慾知足で、何んでも、人より一風變つた生活を樂みとして居るのですネ、」

○「罪なくして、配所の月ならよいけれど、三界家なし、財なし、夫なし、子なし、仕方なし、の轉地三昧、そんなに羨むべきものではないですよ、之を知足の境界なんて評しても、一向馱目さネ、」

一「併し、吾輩等は、長く如斯モノトナスな生活をして居ると、全く阿呆になり終つて仕舞ふネ、……活動世界に奮闘して、時々骨休めに浪の音に接するならばよいけれど、吾輩は一週間以上、到底こんな閑寂の境に居るには堪へられない、」

○「そんなに長く滯在して下さらなくともよいですよ、」

一「だから、明日は久能の東照宮へ參詣して、それから靜岡の淺間神社を見て直に歸京しますよ、」

若「久能へ行く道すがら、龍華寺へ寄つて、一寸、高山先生の墓へ參つて行き給へナ、」

一「そんなら、君も一所に行かう、」

若「僕は、先生の御墓へ詣つたら、おもふまゝ泣いて、天才の亡魂を弔つて、お墓に接吻して來るつもりなんだ、」

一「オ墓に接吻！、之れは奇妙だ、成る程巢鴨行の人物は違つたものだネ、」

○「サア〳〵、モウ、オ話はよして寢ましよう、浪の音の遠鳴る工合では、もはや、夜はよほどふけてたらしいから、」

おさん「皆樣の、御床をのべました、」

○「私は、座敷の炬燵の傍へねますから、貴方方は本堂の方へねて下さいナ、」

一「本堂へねて、佛樣に引導でも渡してもらへれば、仕合だネ、」

若「本堂なんて、寒くて厭だナ、」

○「そんなヤンチャを云うても、もう床がのべてあるのだから、早くお休みよ、」

兩人「お休みなさい！！、」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯くて翌日、龍華寺に詣でたる紀念の繪はがきを見れば、「舊師高山氏の奥津城に詣でゝよめる、

とこしへの若き御靈の國戀ひて
夕日の墓にわれ一人たつ、

○

さざみたる文字の御魂の殘るやと

眞白き石にたゞ口つけぬ、

とあり、こは、正しく中有ぬしの中有たる所以にして、また、天才の天才たる所以にてもあるべき乎、あなかしこ、（明治四十年）

龍華寺詣で

○「敏○さん、龍華寺の方へ、散歩に出かけませんか？、」

×「龍華寺へは去年も往きましたから、今日は幸ひお天氣もよし、三保の松原の方へ遠足をしようぢやありませんか、」

○「けれど、私は是非龍華寺へ用があるのですがネ、」

×「用ッて、まさか日蓮宗に改宗なさる譯でもあるまいし、勿論、死んだ高山さんと、オ話をなさらうといふ次第でもないでしようからナ、」

○「所が、高山さんとオ話をして來ようといふのですよ、」

×「馬鹿らしい、そんな事なら、尙更御免を蒙ります、」

○「まあ、そう一概にけなしたものではありませんよ、實はチ、新公論の櫻井さんに遠から頼まれて居るので、龍華寺の高山さんの御墓へ視察に行かねばならぬ事があるのですよ、」

×「文學者の御墓研究なんて、ドライな頭腦の吾輩などは、到底はまり役ぢやありませんからナ、」

○「ナアニ、文學的の事でも何でもない、只高山さんの、御墓の傍の、七面堂の壁の樂書を見にゆく迄の事ですから、其實誰でもいゝのです、」

×「それでは、龍女に見込まれたと諦めて、オ供をしましようか、」

○「どうぞネ、そうして下さいナ、」

×「さあ參りましよう、……全體、龍華寺は清水領なんですか、」

○「御覽の通り、清水港へ向つて居りますが、勿論、清水町の區域ではなく、目

下は静岡縣安倍郡不二見村に屬して居て、徳川時代には久能領で在つたとの事ですが、往古から歌の名所の有渡の里と云つて、名高い所で、「萬葉」などにも出て居る位ですよ、トコロガ明治の政治屋さんが、無趣味にも、有渡郡を止して、安倍郡として仕まつたのですからネ、」

×「それは殘念な事をしましたナ、」

○「一體、私は此土地へ來るまで、龍華寺は興津に在るとばかりおもつて居たのですよ、」

×「それは又どうして？、」

○「どうしてつて、乘ねて高山さんのオ書きになつたものを見ても、亦殊に、「清見潟に於ける高山樗牛」などゝいふ小冊子を見ても、高山さんは生前興津に居られたので、隨つて、龍華寺は興津に在る事とばかり、信じて居りましたのですよ、」

×「興津に在るのは、清見寺ぢやありませんか、」

○「ですから、大方、清見寺と龍華寺とは、御近所だらうとおもつて居ましたのサ、」

×「隨分迂濶な高山研究家ですナ、」

○「迂濶に相違ないけれど、私だつて、此處（不二見村）に住居するまでは、そんなに高山さんに關した細かい事などを、氣にも止めて居なかつたのですからネ、」

×「そして、高山さんは興津の何處に滯在せられたのでしよう、やはり、オ寺か何んぞでしようか、」

○「其事に就いて、私はわざ〳〵御親友の姉崎さんにオ尋ねしたら、「高山さんの御滯在なすつたのは、興津の清見寺のつひ下の、三清館といふ家で在つたが、今はもう其家が病院に變體して居る」と、いふ事ですよ、」

×「けれど、人によると、江尻の龍華寺といふ方もある樣ですナ、」

○「それはつまり、この龍華寺へ來るには、江尻の停車場から降車するからですよ、」

×「そして、清見潟といふと、一體何所を指すのでしよう、」

○「昔の清見が關の在つた所、即ち、今の興津の清見寺の下の方に、關所の礎が少しばかり殘つて居りますが、まづ、其近邊の濱を清見潟といふのでしようよ、」

×「そうですかナ、」

○「やれ〳〵、オ話をしてゐた内に、もう龍華寺の門前へまゐりましたよ、ア、つかれて呼吸が苦しい、」

×「たつた五六町で、もうそんなに弱つたのですか、それぢやとても、七面堂の石段は、登られますまい、」

○「横の坂から廻れば、そんなでもありませんよ、」

×「時にこの堂の後の山は、何山でしよう、」

○「これは、天下の三大要害と云はれた、有名な有渡山脈の一部分です、この南端が、即ち、久能山で、家康公の御廟の在る所ですよ、」

×「家康の廟は、日光ぢやありませんか、」

○「初め一應は、單に大名の家康としてこの久能山へ葬つたので、後に天下の家康公として三代將軍の時になつてから、日光の方へ改葬したんだつて云ふ事です、」

×「それでは、いよ〳〵、樂書きの研究に取りかゝりましようか、」

○「マア一應、オ墓へオ參りを致しましよう、」

南無……

南無……

×「碑は大理石を斜面にして、周圍の鐵鎖を石柱で支へた風などは、日本にはあまり見ない樣ですナ、西洋の何んとかいふ文豪の墓の型でしようか、」

○「それにネ、高山さんが、晩年あれ程日蓮上人を崇拜なさつて、わざ〳〵日蓮宗の此ォ寺へォ墓をォ建てなさる位だから、私はやはり碑面には、例の髯題目か、さなくとも、何か日蓮宗に因緣のある文句が、彫んで在る事とおもつたら、全く當がはづれましたよ、」

×「そんな普通の事では、全く平凡な遣り方で、チットモ現代を超越せん事になり終るぢやありませんか、」

○「けれど、碑をォ建てになつたのは、高山さん御自身ではなく、後に殘つた御友人や、御親族方ですからネ、」

×「だから、その方達も、やはり、現代に超越して居られるのでしようが、それにしても、碑面に、

『吾人は須らく現代を超越せざるべからず　高山林次郎』

とある、この文字はよほど巧いが誰が書いたのでしよう？、やはり高山さんの直筆でしようか？、」

○「高山さんは、よほど名筆であつたとの事ですが、まさか、自分の碑文を書いておくほど、超越もしてォ出なさらなかつたでしよう、これは、此寺の隣寺のあれあそこの森の中の海長寺といふ日蓮宗の守本文靜師の筆だそうですよ、」

×「そうして、高山さんは、此所へ生き埋めと言つては語弊がありますが、死體を其儘持つて來たのでしようか、」

○「そのォ墓の後の棒杭に、チャント『葬遺骨于此從遺言也』とありますから、その通りでしようよ、」

×「成る程『明治三十五年十二月廿四日逝去、翌年一月廿日云々』とありますナ、

折角の事に、死體を其儘持つて來た方が、より多く紀念になつたでしようにナ、」

○「翌年まで、其儘にもしておかれないぢやありませんか、」

×「それを即時にやるのです、」

○「直にそういふ相談もまとまらず、何分、墓地でない所へ墓を建てるといふのですから、其手續きにも、大分手間が取れたそうですよ、」

×「僕は曾て、高山さんのオ墓の周圍を、公園にするといふ企が、樗牛會にあるなど聞きましたから、もつと廣い所かとおもつたら、敷地はやう〳〵十歩許りで、これではあまり狹いではありませんか、吾輩なら、大きい寢かへりをすれば、直に崖下へころげ落ちて仕まふナ、」

○「近年は、名勝古跡が、だん〳〵と俗化するのが遺憾だから、社會的事業の一ッとして、それを保存したいといふ樣な話を姉崎さんがして入らした事もありますから、樗牛會の企圖も、大方そんな事なんで、單に此オ墓の周圍丈といふ樣な狹い事ではなく、清水灣全體の風光に關した事ぢやありませんか、」

×「かへす〳〵も、惜しい事には、此所がせめて一町四方もあつたらよからうにナア！、」

○「そんなに廣いと、陪席者が多くなつて困りましようし、これなら、もう外に誰のオ墓も建てやうがないから、つまり、高山さん一人が唯我獨尊ですからネ、」

×「なる程、理屈をつければ、そんなものですかナ、」

○「閑話休題、サアいよ〳〵その樂書を讀んで下さいよ、」

『御墓訪ふに榮なき子とて何かあらむ
君が言の葉胸にひそめば、
三十九年八月廿八日、　卯月竹馬　白百合』

×「歌は巧いやうだが、この二人の中、一人は男子で、一人が婦人でしようか、若くは二人共男子でしようか、」

○「そんな事は、何ちらでもよいてはありませんか、次のを讀んで下さい、」

『不二見村字駒越　渡邊潤水

明治三十七年正月七日、故文學博士高山先生の墓前に跪拜して、以て先生の菩提を弔ふ』

『高山林次郎氏の墓に參拜すべく登山す　靜岡縣農學校生徒　淺井氏』

○「始めのは、坊さん臭い事ネ、その次は、」

『弔高山氏　留月生

君呼べは夏山こだま遠きより

さらに悲しき名をのせて來し』

×「單に、自分の姓名丈け書いたり、又は半分消えたのは止しましようナ、」

○「勿論消失したのは、讀むにもよみ樣がないぢやありませんか、」

『信濃國福島町漆器株式會社員』

『メサマシはみがき本舗　云々』

×「などゝ書いたのも在りますよ、」

○「そんなのは、丸きり此所を無料廣告場と心得た連中で、何んにも高山さんに關係がないてはありませんか、」

×「すると、

『富士の根も霞の奥にきえはてゝ

一ふし目だつ三保の松原、　村松健兒、俳號　月芳』

×「これも、全く高山先生には關係がないやうですナ、」

○「無關係でも、歌なら書きとめておいてもよいワ、……オヤ〳〵、其傍に、やさしい筆の跡も見えますネ、」

『又けふこゝに香をそへて、幽蘭の一枝、撫子も共に、露草のはかなかりし樗牛先生をとむらひ、感慨無量……藤枝』

×「ヤア、そこの、ハート形の中にあるのは、大分氣どつたものですナ、」

『緑蔭の今日、君が御墓に訪づ、我等を導きしは、三保の松籟と、龍華寺の蟬聲!!!、

日本女子大學國文科生　山菅たつ　細川秋雨　根岸秋江』

○「女學生の名なんて、氣の毒だから書きとめずにおきましようか、」

×「ナアーニ、こんな所へ公然書きつけて置くのは、つまり自分の名を人に知られたいといふアンビションに外ならないのでしようから、斟酌するには及びませんサ、それに、多分實名ではないでしようよ、」

○「そうでしようか、高山さんには、なか〳〵女性の信者が多いと見えて、大分、女の名も見える樣ですネ、

『三十九年八月二十二日、高山氏のおくつきに詣でゝ、日本女子大學校生徒　永井照子』

『靜陵の女性健脚家の流を汲む者、久能山參拜の途次、茲の清境を訪ふ、　貞子　龜子　時子　鐵子』

×「そのつゞきに、

『ばか二名　村園、赤脚』

なんて書いたのは、何のつもりだらう、」

○「この『ばか』さん二人の筆跡は、靜陵の女學生云々と同じだから、もしや同行者ではないでしようか、」

×「女性健脚家の流を汲むなどゝ在る所を見ると、却つて此男性二人の方が、女

連よりも、より多く疲勞したのかも知れませんナ、……實に、その言の如くばかゝゝゝしい連中だ、」

○「外國語のも在るやうですネ、」

×「在りますけれど、判然讀み得らるゝのは尠ないですよ、』

『A student of Waseda-University.
M. Suzuki.』

○「それは大分はつきりして居るやうネ、」

×「けれど、此方の方に、

『戰の中は吾人の肉なり、先生に走るべく墓に訪づ、』

この傍にある洋語は、どうしても分らんのです、」

○「分らんのは其儘にして、オ次を願ひます、」

『明治三十八年七月廿八日

日蓮宗大學校生　眞壁寛如

白雪敞畫高岳下　艨艫三隻泊淀風
黑烟登天清絶景　爽然恬然炊舞砌

肥前國住人　松本某』

×「サア此詩が、左右何れの人の名吟だか分らんのです、」

○「それても、詩でしようか、」

×「無論、本人は詩のつもりて書き散らしたのでしようナ、ハヽヽヽヽ、」

『嗚呼、肉體高山林次郎は逝けり、されど靈の林次郎は、長く茲に生存す、

高山崇拜の一人、濃眉生、明治三十八年八月廿九日參拜の砌』

○「こんなのは元氣があつて、却つて男らしい樣ネ、」

×「男らしいのがよければ、最南端上部の、

『弔高山先生

なんていふのは、最も勇氣に滿ちて居ますサ、」　東郷平八郎　上村彦之丞』

○「いつぞや、東郷さんの御一行も此邊へ御出になつたとの事だけれど、まさか御本人ではありますまいネ、」

×「無論ですとも、よく往來を通ると、紙袋を冠つた清正公だの、竹の棒を携へた義經さんだのを見かけますが、マア、此東郷さんや、上村さんも、其類でしようナ、田舍の旅籠屋の宿帳には、大石良雄だの西郷隆盛だのと書いておく連中もあるさうですからナ、」

○「けれど、子供にはあんな高い所へは手は屆かないワ、」

×「だから、未來の海軍大將を夢みて居る青年連のいたづらだと云ひますのサ、」

『水無月綠深き所、躑躅のあはきが中に、先生の墓を訪ふ　杉田德藏　富田釘作　市川亮』

『再び來らざる高山氏は遂に永へに去りゆけり、然れども、靈魂は今尙此所にあり、　甲府商業學校　三十八年十一月六日　成島祐吉』

×「なる程、色々のがありますナ、」

○「その次は、」

『嗚呼櫻牛先生……』

×「それから、後は壁が落ちて居るのです、」

○「何んですつまらない、」

×「けれど夫がファクトなんです、……モウ大分讀み飽きましたナア、ア、ア、、」

○「その並びに、早稻田大學生何んとかいふのが、澤山在るでは御座いませんか、」

×「名ばかりのゝはつまらない！、」

○「つまらなくても、紹介をなさいな、ファクトだから、」
×「あまり大勢だから、面倒臭い、」
○「御自分の母校の連中だから特に辛抱をなさいナ、」
×「それも母校の因緣因果ですかナ、……こゝにも、高山さんの母校の連中の書いたのがありますよ、」
『明治三十九年一月十六日、先生が母校の學生、大森喜一、鈴木操等、同行一同博士の靈を弔ふ』
○「高山さんの母校つて何所でしよう、小學校は鶴岡で、中學校は福島で、それから仙臺の高等學校を經て、東京の大學へ來られたのだそうですからネ、」
×「多分仙臺あたりの連中でしようナ、」
『京都醫科大學生　歌川式』
×「醫科の人なんて、一寸珍らしいですナ、」

○「醫者が文學を解し、文學者を崇拜せぬとも限りませんからネ、近い話が、鷗外さん（醫學博士森林太郎氏）などは、オ醫者さまとしてよりも、文學者としての方が世に名高く、それに、醫學士の石田昇さん（雄島濵太郎氏）だつて、新進文學者であると共に、非常なジッケンスの崇拜家だそうですからネ、」
×「すると歌川さんなどは、姓から始めて文學者めいて居るといふのですか、」
○「今は議論をするのぢやありません、一寸一例を示したゞけです、」
×「アヽ、そうですか、」
『余既に現代を超越せり、何んぞ樗牛の言を要せんや!!!、』
×「こんな事を書くのは、まだ超越せぬ證據ですナ、」
○「誰です、」
×「名はありません、」
○「それぢや、半分超越して居るのですネ、」

『天下の英雄文豪……』

×「そのつゞきに、何かグヂャ〳〵書いてあるけれど、墨痕が薄くて分りません唯最後にKatoといふ署名丈は、讀み得られますがナ、」

○「その次は、」

『久能山に家康の廟を拜し、今龍華寺に櫛牛の墓に訪づ、一は卽ち劃策の人にして、一は卽ち意志の人だ、感慨無量！』

×「此文句に署名はありませんよ、」

『帝國大學文科大學生　羽生隆』

明治三十九年四月一日

○「と、チャンと書いてあるぢや御座いませんか、」

×「けれど、羽生君のは、それ丈を別にキチンと輪廓が施してあるから、前の文句と關係はないらしいです、」

○「家康公を、劃策の人として、高山さんを意志の人といふのでしようか、」

×「そうらしいですナ、」

○「併し、高山さんは、むしろ感情に富んだ方だそうて御親友のオ書きになつたものゝ中に、「高山君は感情の人也、されど感情の點數多しといふ丈けにて、意志も理性も及第點以上はありし樣なり云云」といふ事は、たしか中央公論に載つて居つた樣におもひますがネ、」

×「天才といふものは、どうしても感情的に出來上つて居るから、高山さんも其例に漏れられなかつたでしようが、併し、劃策の人が、また意志の人てある事は出來得るのてあるから、こゝに書いてある文句は、寧ろ意味をなして居らぬぢやありませんか、」

○「それもそうネ、

『先生の名と共に殘れ此句ひ、

先生の御德を慕ひ尋ねけり、　渡月』

何の香いでしよう、まさか、オ墓に匂ひもありますまいしネ、」

×「その上の方にある、」

『聖一色飯田國作高山先生の墓に參拜す』

これも分らぬ文句ですナ、」

○「その方が、禪語めいて居つて、却つて何か意味が籠つて居る樣ぢやありませんか、」

『吾人は現代を超越せざるべからず、故に吾人は、龍華寺山頂に埋骨の地を選ぶを要せず、須らく、魚腹と、將又青山ぃ麓とを選ぶを要せざるなり、茫生』

×「これはなか〳〵穿つて居ますナ、」

『たづね來てかへるはさすがつらかりき

かゝる景色を後ろにはして』

○「もうこれ丈けでしようか、」

×「少しは、目こぼれもあるかも知れませんが、もう大概讀み盡した樣です、……ャ!!!、オ待ちなさい、石碑の横に何か書いてある樣ですぞ、」

○「まさか!、石碑に樂書なんて?、」

×「イヤ〳〵ありますよ〳〵、大理石に鉛筆だから、極薄いけれども、たどつて讀めばよめます、」

○「何んとありますぃ、」

×「まあづ南の方には、

『羽衣の松を經て來る凉風は

永眠せらるゝ君をうらやむ』

それから北の方には、

『先生の墓凉しやな三保の風』

西の方には、

『貴下の尊命により余等の目的に突貫す』

『Visit here, 1907. 27 of July. X』

などゝあります、」

○「マア、石碑にかき散らすなんて、本當に樂書中の樂書といふべしだワ、」

×「いよ〳〵これで終り!!、」

○「サアまあ、龍華寺の本堂でゆつくりオ茶でも飲んで休みましよう、そうしてネ、本堂に高山さんの御位牌がありますがネ、勿論、此所にあるのは日蓮宗の命名に依つた戒名です、併し、初め高山さんが死なれた時は、鎌倉で葬つて、日蓮宗でなかつた筈ですから、私は必ず別にもう一ッ戒名が在る筈だとおもつて、それを信チャンに問ひ合せたのですよ、」

×「信チャンッて?、」

○「ソラ、高山さんの令弟の信策さんサ、」

×「アヽ、齋藤文學士の事ですか、」

○「するとネ、信策さんからの返事がかうなのです、」

『近頃戒名文學御研究の由……而して鎌倉にての高山の戒名とやあれは隨分滑稽のものに候ひし、實は當時は龍華寺一件などは相談に上らず、さしあたりお寺に困つたれば、丁度地主の長谷寺が幸ひと、親類どもの相談てオ經をお頼み申したるわけ、所でそれは淨土宗なりし、なに現代を超越せる人には、何でもよろしからむと、其時は思ひ申候、其時の戒名は、「仰見院文譽高山樗牛居士」即ちこれに註すれば、「多くの人々より仰ぎ見らるゝ程、慕はるゝ、これ文學で譽れを得たる故なり、而してこの人は誰ぞ、高山樗牛即ち是れ、」但し鄕里にては、この戒名固より用ゐず、希臘語のプラトーよりも難かしき、例の龍華寺にあると同じき「文亮院靈岱謙光日膽居士」にて候、もし俗人なら

ば、かゝる場合に、淨土か法華かで、亡魂宙に迷ふ所ならむも、超越せる人にはこんな心配毫もなからむ、本人はいざしらず、私は平氣なものに候「是に於て乎、超越の要あらずや、私などは、淨土でも法華でも極樂でも、地獄でも、天國でも、高天原でも、さら〳〵苦しからず候、あばれ我は、如何なるものにも超然たり！超然たり!!、……今日は、命日なればこれからヵ寺參り なり、私もさらばノンセンス（non sense）なる戒名文學の研究でも致し可申候……國許の寺は禪宗にて候……穴賢々々、

山形縣鶴岡にて　齋藤信策拜

×「すると高山さんの御郷里は羽前の鶴岡なんですネ、そして高山さんと齋藤さんとは、本當の御兄弟だといふのに、どうして姓が異つて居るのでしよう、」

○「それは、高山さんが、齋藤家の御次男である爲に、伯父さんの所へ養子に行つて其家を續がれたからですよ、齋藤さんは其又末の末の弟さんですとサ、」

×「お國のヵ寺が、禪宗だとすると、ます〳〵奇妙ですナ？、つまり、高山さんは何宗の極樂へ行きつかるべき筈でしよう、」

○「あなた達の樣な、權利義務の頭腦から割り出して考へれば、そういふ疑問も尤もですが、私などは、高山さんは、何宗の極樂へもゆかれず、矢張り此所にやすんで居られるとおもひますがね、尤も御法事や何かは極幼少の頃、高山さんが通はれた寺小屋が、日蓮宗であつたといふ緣故もなり、旁々今では、そこで讀經などを願はれるといふ事ですけれどもネ、」

×「何故、極樂へ行かれぬのです??、」

○「高山さんは、風が吹くと、金銀の木の葉が、舞つて來てぶつかつたり、七寶の砂礫が、ギラ〳〵して、眼の痛むやうな極樂へは行かれず、天然の美觀を備へたこの龍華寺が、即ち高山さんのヵ淨土サ、有渡の里、三保の濱、雲に聳ゆる富士の山、白帆行きかう海原、これが即ち、高山さんの憧憬された、藝術的

の極樂でしようよ、」

×「なんだか、八ケましい事になつて來ましたナ、」

○「けれど、そうでもなければ、わざ〳〵、此所を埋骨の地としたいと被仰つた理由が立たぬではありませぬか、」

×「それもそうですけれどナ……、」

○「さあ、もう大分休んだから歸りましようよう、」

×「そういたしましようかナ、やはり如斯明媚な風光に對して居ると、歸る事がいやになりますな、そしてこの蘇鐵はなか〳〵美事ですな、」

○「今日では、龍華寺といへば、直に高山さんのオ墓をおもひ起す人が多いでしようが、昔から此蘇鐵がなか〳〵龍華寺の呼び物なんですからネ、」

×「實際、これ程の大きサに、よく生育したものですナ、」

○「枝もよく繁茂して居りますワネ……、まあ、やはり、かうやつて居ると、天地悠々の氣持が致しますのネ、」

×「全く、自然に融化しそうな、心持になりますナア!!!、最後に僕も一ツ樂書をして行かうナ、」

『蘇鐵青し才人樗牛眠る寺』（明治四十年）

憂　愁　の　人

その一、旅　衣

京に歸りて、はや、四日を過し申候、ゆくりなく、御閑居を驚かしゝ、旅路の夢を思ふにも、そゞろ床しきは、御令弟の無邪氣なる御物語、姉上の溫かなる御もてなし、いづれ忘れ難き感興を、心の奥に留め申候、實に御地にありし三日の程は、面白かりしと言はんよりは、宛ら、醉ひたるが如くに候ひき、これ全く、かの海邊の空氣の爽かなるによる事と存候が、若しも、圖らず、御目に懸りし、彼

の姉妹の君達の魔力によりてなど申さば、失禮にや渡り候ふべき、有體に申さば、小生事、御地へは、是迄、度々參りしにも關はらず、此度程、愉快に感じたる事は無之、由來樂しき夢は醒め易きものと承り候へ共、此度のものゝみは、永く〳〵見まほしき願に候こそ、我ロマンチックなる本性と御承知被下度、只、姉上よ、樂しき夢の片影には、何やらん、言ひしらぬ悲みの跟跡の殘るものなるをさとり給ひてよ、

いよ〳〵、出立の日、彼の小松原にて、皆樣に御別れ申候時！、雨ふる中に、ションボリと、互に別を告げし其折よ!!、猶豫なく我俥の進み行く其刹那に、たとしへなき悲みの、我心に溢るゝを感じ候ひし、そは、如何なる故ぞと問ひ給ふか、實の所、小弟は姉上の病み衰へ給へる面輪をみて、悲める譯にても、無之、小弟は、小弟自身の理由を持てるにて候、……始めて御目に懸りし、彼の姉妹の君達の御言葉は、小弟に、一種のインスピレーションを與へ申候、今斯く筆に走らせ居る中にも、彼の君達の優しき聲音が聞ゆる樣に覺え申候、オ、姉上よ、願くは一喝を加へ給ふ勿れ、

さはいへ、いつまで、旅路の悅樂に醉ふべき身にも候はねば、少しは精進の境に立ち歸り候はん、机上のノート、ブックは、塵と共に堆かく、書架の數十の書籍も、背の金文字を耀かして誡め顏に有之候、

昨夜は暫く自然に親みたる心を以て、友人を訪問致し候に、潮風に吹かれ候ためか、少々色が黑くなりて、大變丈夫らしく見ゆると賞められ申候、……小生は口を極めて東海の美觀を說き、春の景色の鮮かなるを語り申候、

あこがれの翅もがなやさらばかけむ
　雲みな光る夕ばえの空、
草かげのすみれの花よ戀ありや
　色はゆかりの紫あはき、

くだらぬ事のみ書きつけ候へ共、併し、一字一句些かのいつはり無之候、先は御禮ながら、草々、

四月十日

その二、寂しさ

御書面拝見、處々苦笑を禁じがたく候ひしも、兎に角、嬉しく拝讀いたし候、實に、世の中は三日見ぬ間の櫻とかや、御別れ申してより、最早、廿日とも相成申候、而も、此廿日の間の小生は、全く煩悶の人と成り果て申候、新なる樂みは、我魂を擒に致し候、由來、才子は多病と承り候へ共、才なきものゝ病こそ、至つて哀れに候はずや、只今は、畏友△△君と同宿にて、親み居り候へ共、彼は活動の人、我は憂愁の人、彼は曉の光、我は夕日の影、彼はかしこに、我はこゝに、隔てたる心には非ざれど、及ばぬ才の恥かしく、口惜しく、我と我身を歎ち居候、姉上は、小弟に、種々の望を御囑し被成候趣、難有事と存じ候、果して、御望を全うし得るや否や、今は我ながら疑はしく被存候、如仰、いかに讀書萬卷、博學の人と相成候とも、信念なく、安住なく、理想なく、自覺なくば、何の價値もなからん事は、小生も萬々承知に候へ共、小生目下の大苦痛は、自己生存の意義を、自ら悟り得ざることに候、何事を爲すとも、味氣なく、つまらぬ心地のみして、更に愉快を感じ不申候、ア、、如何なれば斯かる悶えの人とはなれる??、小弟も亦、姉上の如くに佛陀の慈悲に憧れて、歡喜と平和の充ち滿てる、寂光世界を慕ふの念慮はありながら、心脆く、力足らずして、向上の一路、遂に我事に非ざるかの歎聲を洩す許りに候、姉上よ、願はくは、疲れたる旅人に、憩ひの汀を敎へ給へ、今は、只小弟は何物かによりて、心の渴を醫したく、切に〳〵祈願するのみに候、かゝる折、思ひ出づるは、過ぎし日の夢路に候、ゆくりなく、彼君達と相知りて、睦み交り候其折よ、宛ら新らしき生命の湧きいでたらん心地なりしも、

これも、今は幻の影と消えて、限りなき、寂しさの國にさまよひ居候、

寂しさよ寂しさよ寂しさよ
　我ひとり我ひとり我ひとり、
我ひとり寂しさと
　共に棲みともにいね、
春いくつ夢いへつ

ア、こゝに二十三、

此心地、如何ならん、オー姉上よ、

釋尊も、晩年に至りて、眞實の禪定に入らせ給ひしとか、小弟の、かゝる事言はんは、あまりに、口ひろきわざながら、光あり、微笑あり、大に悟らん前には必ず迷なかるべからずと覺悟いたし居候、あまり、要なき事など書きしるし、いかに姉上なればとて、汗顏千萬に奉存候、

猶一つ、御願有之候、もし、過日大勢にて撮りし寫眞、御手許に有之候はゞ、是非、一葉御惠與のほど願上候、……敬愛する人々の面影を以て、光なき書齋を飾らんは、小弟にとりて、此上なき喜びに御座候、頓首、

逢ひし恨み逢はぬ歎きを包みつゝ
　落つる涙やいかに急なる！、

四月二十五日夜半認む

その三、ありし面影

姉上よ、此頃のふる雨を、いかに眺め給ふぞ、

過日は、はかなき夢の跡を、憚りもなく申上げしを、如何ばかり驚き給ひつらむ、許し給へ、實に、小弟は彼君の魔力に魅せられしなり、姉上よ、もしも、姉上が、小弟がまだ郷里に在りし頃、をさなき心に刻みたりし思の、今日までも、忘

れぬ紀念となりて、殘れるを知り給はゞ、容易に、今の小弟が心の奥をも、解し給ふならむ、姉上も、その面影のみは知り給ふ、我從妹の直ちやんをば、忘れ給はぬならむ、さるにても、過ぎし日、彼の姉妹の君達と逢ひて、その幼き君の面影の、フト、我がなき直ちやんと、似通へるを、思出せし時の我驚きよ、我が戀は、古き愁の花草の、新に萠え初めし者に候、不便とも、思召し候へかし、

御承知の通り、小弟が母を失へるは、小弟が十三の歳に候ひき、勿論、父とても、我を慈しみ給はぬにはあらざれど、謹み深き母の性質を受けて、寧ろ、臆病なりし小弟は、嚴格なる父に接するよりは、慈愛に富める叔母君に近づくを好み候ひき、もとより、その理由の一は、小さき直ちやんの、友愛の力の、我を牽きたりしも明かに御座候、されど、其頃、我等は、唯、心あひたる友だちなりと思ふの外、別に、ませたる心を持つべき年齢には候はざりき、されど、心の奥底に、ゆかしの人、なつかしの少女と、思ひそめたるは、確かに候ひき、

直ちやんには、一人の兄と、幼き弟とありたれど、弟君は、我等が友たるには、あまりに小さく、兄さんは、元氣よく粗暴なる少年に候ひしまゝ、直ちやんは小弟にとりては、唯一の友達に候ひき、遊ぶ時も、學ぶ時も、互に相離るゝはまれにて、彼女は、宛ら、天使の如く、我眼に映じ候ひき、

何時なりけむ、一年の夏休みに、直ちやんや、小弟等と共に叔母上に伴はれて、越後へ海水浴に行きし事候ひしが、二人があどけなき遊びは、今も尙、なつかしく思ひ出でられ候、こゝの磯、かしこの濱に、四つの小さき足跡を記さぬ隈もなく、野徑に草花を爭ひ採りしも此時！、小川を助け合ひつゝ渡りしも此時！ア、、この時こそ、之の周圍には、天國てふ者の面影も見えたらむ、戀とは言はねど、甘き嬉しき心地にこそ候ひしが、

潮の音に夢また夢を辿りつゝ
夢路のはてをいかに夢みし、

然れども、さめては、夫も遂に夢なりし、相愛したる二つの魂は、永へに別れ〳〵となりて、直ちやんは、はかなくも彼の世の人となり、小弟も、亦、病にかゝりて、幼き愁に痩せ衰へ候が、肉の病は、やゝに癒えて、魂なき軀は、かくて存らへ、青年何事ぞ、傷心の人として、光なき命を保ち居り候、直江津の濱、郷津の磯、憶ひ出づれば、潮の音も、海の香も、いづれ涙の種に候よ、

かゝる思ひに、明し暮して、胸の傷は、また癒ゆべくもおぼえ候はざりしに、圖らざりき、去りにし人の面影を、端なくも、彼の日、彼君に見てしより、愁は新に湧き返りて、今は殆んど、堪へがたく候、ア、、此愁を癒すは誰ぞ！、靈はたゞ、靈に依つて救はるゝとか、此後は、神佛の溫き慈愛の光を浴びて、悟達の人となる外、せんすべもなくや候はん、

望みは高く、心は弱し、姉上の嚴かなる御訓誡は、此身此心に耐へ兼ね候、如何にせむ！、如何にせむ！！、ォ、姉上よ、

六月六日雨をきゝつゝ書窓の下にて、

その四、脆き心

御令弟の御上京に托し、御手紙下され、確かに落手致候、久かたぶりにて、御令弟に御目に懸り候ひしに、微笑と、光に輝き給ふ、御顏色の羨しさよ、例の如く快活なる調子にて、無邪氣なる話をせられ、我等もいつしか活き返りたる心地いたし候、解脫の福音、愛の福音を、圖らずも、御令弟の口より聞きて、心すがすがしう覺え申候、されど、其喜びと、微笑とは、瞬間に候ひき、げにそは、我魂の奥底には、滿ち充てる黑影を、遂に拂ふべくも候はざりき、御令弟と入違ひに、同國の友人來り、やがて〇〇先生も訪ひ來ませるまゝ、御手紙を懷にしつゝ、氣をもみ〳〵、やつと、夕方になりて拜見致候、

賜はりし玉章花の香もなうて

冷たき人の言の葉ぞうき、

嬉しき御便りとおもひきや、いやみやら、御小言やら、讀み行くまゝに、心から恨めしく存じ候、さりとは、あんまり御なさけなき仰せにあらずや、姉上なればこそ、我ハートの、愁も、惱も、殘りなく打ちあけて語りまゐらせしを、小弟が、神經中樞に異狀ありて、將に、巢鴨行の前段なりなど、判じ給ふとは、餘りに冷淡に候はずや、殘酷に候はずや、姉上の御住居に、集ひ來るものは、男にてもあれ、女にてもあれ、只、兄弟の愛もて交れ、一切の祕密は許さずとの、かねての御諭しを忘れしにはあらねど、迷ひそめにし我心を今更いかにかすべき、もとより、彼君達は、容易に、我等の近よるべき際の御方にはあらずと存じ、且は、彼の幼き君にも、すでに〳〵定まれる婚約の夫君ありとは、いつかの御話にて、おぼろげながら、知り候ものゝ、あまりに、亡き人に似通ひし面影に接し、奇しき思に打たれ候ては、如何でか、此場合に、冷たき理性の判斷力を容るゝの餘地あるべき、知識の前に、我は已に醉ひたり、されど、アヽ、今は萬事休す、我胸は、只張り裂けむばかりに候、あぢきなき此身なり、ながらへて何にかせん、死の神よ、疾く〳〵我上に來れ、今は我願ひは、たゞ〳〵、是れ一つにて足り申候、

ゆくりなく若き愁ひに惱む子の
　脆き心を人しるらめや、
夢とのみ強ひて笑みつゝ生きむより
　永劫の眠よ我に幸あれ、

姉上が、小弟の拙き歌屑に同情をよせ給ふとも、いたく打ちこらし給ふとも、そは、わが關する所には無之候、小弟は、唯、おもひに沸きかへる時、溢るゝ太息を、我しらず、心の奥より、みぢかき歌に、もらす許りに候、小弟が今の最後の隱れ家は、全くこの太息のみに候、アヽ、我は天地に只一人、星に語り、花に泣いて、悲哀の苦味を嘗め盡さんか、アヽ、我胸は痛む、オヽ、姉上よ、さらばよ、

おゝさらば！、

六月十二日

その五、卒業

過日來、試驗の爲め、意外の多忙を極め、御無沙汰致し候、此頃は、その疲勞も有之候にや、昨今、いかにも意氣悄沈致し居り候、小弟は、どうしても、小弟の境遇に一大變化を與へねば、限りなき憂愁をぬぐひ去ること難く候、「復活にあらざれば、即ち自殺」、此の者何れを撰ぶべきかは、小弟が目下の問題に候、おゝ姉上よ、小弟が目下の苦悶を以て、單に失戀のそれとのみおもひ給ふなかれ、小弟が煩悶は、理想を失へる煩悶に候、現在を超越せんとする煩悶には、社會人文の成果に對して、呪咀を敢てせん煩悶に候、小弟に新らしき理想あらしめ給へ、然らざれば、死を與へ給へ、小弟は今の社會、今の道德、今の宗教に滿足して、現在を享樂し得る者に非ず候、然れども、然れども、小弟が享樂し得べき新生活！嗚呼これ如何なる生活、如何なる理想に候ぞ、是れ小弟が目下の一大問題なり、生死を賭して解決すべき問題なり、問題の解決は、何を與へ候べきぞ、曰く、復活か將た自殺！是れ終局の斷案ならずや、小弟は孰れを取るべきかを知らず、たゞ、復活の人生は尊ぶべく、自殺の生涯も羨むべしと存じ候、復活は、平和の宮居に達すべき第一歩にして、自殺は、寂靜の世界に入るべき門戸なればなり、兩者其歸趣を同じうせば、小弟は、寧ろ、自殺せんか、されど、あゝ、されど、小弟は到底煩惱の子に候、地上の兒に候、……自殺すべくあまりに理性に富み居り候、否、單に理性とはいはじ、小弟の「感情」は、痛切に之を制し申候、即ち「感情」は聲を出して、自殺は殺風景極まるものにして、決して詩的なるものに非らずと叫び申候、

世には、哲學人を殺すなど申すものも有之候へども、小弟に、もし、哲學思想な

かりせば、今日迄は生存せず、すでに既に、遠の昔に自殺せし事と存候、小弟は、「生きて解脱の境に達する能はざらば、死すとも、尙、其域に到るを得ず、畢竟、痛苦は相齊しかるべし」と、ありし古語を、何遍となく、かみしめ〳〵味ひ申候、幾度か、我を誘ふ暗黑なる深淵に臨みつゝも、痩我慢を振ひ起して、やつと此方の岸に踏み留まり居り候、あはれ、かくて生存は遂に小弟にとりての本能なるべく候か？、

本年は、形たばかりの學校の業も卒へ、親族知己に對する申譯、……嗚呼、ほんの申譯丈は相立ち候、學校にては良學生なりとて賞品を授けられ、朋友は小弟の試驗の出來榮えよきを羨み候へ共、噫、かゝるはかなき地上の名譽を、小弟はいかで心に嬉しと思ひ申すべき、小弟が心中には、今後數段の修養を積んで、永遠安住の地を得んと思ふ希望の燃ゆると共に、又、現下の苦痛を去るの工夫をも要し候、小弟が心の惱みを知らざる朋友知己は、小弟が卒業をいたく喜び、鄕里の或る親族は、小弟の卒業を聞くと同時に、其愛孃を妻に與へんと申出せりとか、をかしくも昨日、國許よりの通信に有之候！、されど、小生は我心を欺いて、いかでか、彼等の申出を直ちに容れ候べき、嗚呼、鄕里もつひに小弟が爲には、安住を與ふる地にはあらざるべきか、さはいへ、先達姉上の仰せの如く、小弟は、今心に惱みあると共に、身にも病あるを覺え候まゝ、暫らく塵多き都會の地を去つて、自然に親み、古鄕の山と水とに對して、身をも心をも癒やさばやと存じ候、委細は近日參上の上に御相談可申候、

君よあはれきゝませ己が執着の
　きづなたちえぬ弱き子のなげき、
とざゝれし心地もしけり北極の
　くらく冷たき氷の中に、

例に依つて御笑ひ草までに、おゝさよなら、

七月二十日

その六、歸省

一昨夜無事歸宅致し候、家とは申せ、古郷にはのこるよろこびも無之候へば、我家も他國の心地して、郷里の山紫水明、かはらぬ樣の、却つて怪まるゝばかりに候、

本日夕方、一封の御便り着……ほの闇うなりゆく二階の欄に凭りて、獨り御玉章を讀みし刹那の感興、箇中の消息、ア、何とか察し給ふ、苦笑と、哀感との、交々涌くを覺えつゝ、やう〳〵讀み終り申候、

姉上よ、はかなきは我の運命なるかな、孤心永への歡樂を、雲の外なるジュピターに契つて、あはれ之より幾年の涙を姉上の詩料に供ふべきか、筆に永遠の香りはなくとも、我文は無窮の哀歌なり、……

よもすがら愁ひてさくよ月見草
　月さす間こそ命なりけれ、

夕日かげ消えての後は夕雲の
　行衛やいづこあゝ君問ふな、

兎に角、我性格を新にして、生涯の轉機を闢かん事は、我目前の願と相成り候、此頃の哀感、總てこれ病氣の囁きにや候はん、小弟は、もう少し男らしくならねばならず候、靈魂までが死んでは大變に候、……かくて日夜不安の念に驅られ居り候へ共、乍去、小弟は、狂せる譯にも無之候まゝ、御心配に不及候、煩惱の中に活動の中に、まことは眞晝の夢の中に、信仰の大河の流れの、遠く〳〵耳底に響くを覺え申候、おゝさらば、姉上よ、

八月二日

その七、溫泉行

拜啓……小弟は、一作日より北信の山間、小さやかなる溫泉に、俗腸を洗ひつゝ罷在候、乍去、少弟が憶ひは、今はいづこをさまよひつゝ在りや、信ずる多くの友か、友も知らじ、敬すべき師父か、師父も知り給はじ、兄弟姉妹か、否々、總ては之を知らじ、あゝ唯知り給ふは、神と姉上とのみ、

郷里にも、多少心を傷むる問題も有之候ひしが、變轉中に眞實を掴んで居さへすればと、興味を以て事に當り申候、小弟も、いつ〳〵までも煩悶しつゝ、空しく日を送り、父の心を傷ましめ、弟妹の教育を疎にし、自分一身も、風塵の中に老い了り候ては、折角人界に生を受けし甲斐なき事と存候、かくて昨今、小弟は胸中に一片耿々の理性を失はざらん樣にと、つとめて自らを策勵致し居り候、

昨日は、山里の徒然なるまゝに、大西博士の遺文を讀んで、色々面白き暗示を得申候、大西先生は、哲學者、批評家たるに似もやらず、却々歌なども詠み殘して、床しき性格を持たれたる人に候ひし、叙景歌よりも、むき出しの叙情詩の方が、よく出來て居る樣に覺え申候、而して、俗歌の内に、こんな可笑しいのも有之候、

わしが心は戀する心
戀せにや心がないわいな、

餘りよい調子にも無之候へ共、あの謹嚴なる大西先生の作とおもへば、尠からず感興を覺え申候、

君と手を取り松原ゆけば
人がみる樣な逢ふ人が

先生も、なか〳〵えらいものに候はずや、尙、卷頭に自筆の短冊の縮寫が有之候が、

行けど〳〵到らぬ空を慕ひても

のぼるや人の心なるらむ、

少し理屈に過ぎたる傾き有之候も、實際の事と存ぜられ候、

昨日は、この本を讀んで、何んともなしに勇氣を得申候、之も著者の餘德の一端かも知れ不申候、お蔭にて、どうやら本日は、頭腦の疼痛も少しく癒りし樣の心地せられ候、これから暫時入湯しつゝ、靜養致すつもりに御座候、昨夜散歩の途次、手折り得し山百合を枕頭に挿して寢に就き候に、夜半それとなく匂ひ來る花の香を懷しみつゝ、

夢に見えし幻や何さよふけて
　　火影に白き山百合の花、

小弟も、心靈の慰安に憧がれて、折ふし病的憂鬱に陷り、姉上の三十棒を喫すること度々に候へ共、小弟とても、いつ〳〵までも、歎々をこねて、姉上を困らせは致さず、其内には、屹度御恩がへしの出來る樣につとめ可申候、

甚暑の候、姉上にもつとめて御安泰ならむことを祈り申候、御令弟へも久しく御不音、よろしく御傳聲願上候、匆々、

八月十七日。

その八、心機一轉

この頃の大暑中、東京は堪へ難き暑さの由聞き及び候へ共、當地は、日中も、尙、且、七十度を超ゆる事なく、朝夕は、却つて、冷氣肌に透り候程に御座候、姉上には、海邊の凉風に親み給ひ、別に御變りもなき事と存候、さて、溫泉滯在中消閑のために、近き禪刹の和尙の所へ時々話しに參り候、色々和尙の實驗談なども聞き及び候が、限りなき煩悶懊惱は、懺悔や乃至、自殺にて淸めらるゝものならざるを、小弟も此頃思ひ居り候、飽くまでも、理性の力を借りねばならぬことを氣付き申候、理性の力を借りると申せばとて、あながちに、憧憬の念、思慕の感

情をも壓倒するのみにては無之、却つて、之を清むる事にて候、純潔なる理性を以て、溷濁せる感情を醇化する、つまり、美的態度に成るとにて候、宗教的の愛情、即ち、博愛や慈悲などゝ申すは、つまり理性に醇化されし美的感情に候はんと存じ候、小弟が、今後、世に存へて孜々として書を讀み、思を練らんは、一々この美的感情に自己を沒了せんために候、御意見如何に候や、かゝる態度にて、永劫に、小弟は彼君を忘れ果つべしと思ひ不申、勿論、初めは、私も斷じて忘れ果つべく決心致し候へ共、しかし、美的態度を取らんと決心してより以來、彼君は、再び小弟に忘れ難き人と相成申候、限りなく新らしき、親しきを覺え申候、否々彼君のみではなく、姉上に對しても、總ての女性に對しても、人類に對しても、かゝる心持の逝るを禁じ得ず相成候、しかし、これは、唯、我情緒の理性に清められし瞬間の感に過ぎず候はんも、追々に、此感情を永遠不朽のものとなさばやと存じ候、この願は、即ち、今後の小弟の奮鬪に外ならず候、努力に外ならず候、かくて小生の歸郷も無益のものたらず、長き入湯も、無意味の消閑に終らざりしを悅び申候、不盡、(八月三十日溫泉のかをり香ばしき里にて認む)

その九、瞑想の糸

拜復久々にて御書面頂戴、嬉しく拜讀致し候、姉上にも、夏期中、例に依り、御來客など多きにも關はず、御健勝の由、奉賀候、小生其後の課業(もし課業と云ひ得べくんば)は、入浴と、讀書と、前便に申上候、彼の快活なる和尚を訪ふと、一室に仰臥して瞑想にふけるとに有之候、而かも瞑想の糸は、直ちに我を彼君に結び付くるは當然の事に御座候、思へば、彼君を忘れんと、思ひ苦みし過ぎし悶の愚しさよ、金環一たび、我魂を彼に繫ぎては、之を斷つべき利劍、いづこにか候べき、忘れず、常に彼君を眼前に見、かの聲を耳邊に聞き、懊惱し嗟嘆する其中に、甘露の清泉足下に湧き出でゝ、愁も、煩も、皆これに流れ行く樣覺え候は、

抑も何等の祕密境ぞや、仰ぐべくして攬るべからざりし天上の星屑、今見れば、田川の小流その美しき影をぞ涵す、あゝ、彼君は彼人の彼君として、又、我の我君なり、かゝる矛盾したる瞑想に囚はれ候も、或は、麻痺したる頭腦の、一時の産物なるやも知れ不申候へ共、自ら其事實なるを嗟嘆する事屢々に候、

此間も、彼の禪法師を訪ひ申候、此頃は、もはや、雛僧達とも馴れて、戯言いふ樣になり候へば、案内もせで、直ちに方丈に入り候に、老僧は、頻りに讀書の興に耽り居られ候が、少弟を見て、二三談話の末、語り出てられし一節の昔物語は、小弟の忘れんとして、忘る能はざるものに候へば、誠にその梗概を、姉のお耳にも入れ申さんか、

むかし、とある村の長者に、愛娘（まなむすめ）ありけり、もとより、容顔の美麗なるは、譬へんにものなかりしとぞ、その家の下僕、やるせなき思ひに堪へかね、いひよることゝ屢々なり、その娘のいふやう、御身の赤心は、我よくこれを知れり、女は己を愛するものゝためにかたちづくるといへば、我は御身に一身を捧げん事、いかてか拒むべき、去りながら、如何にせん、我は御身の主の位にあり、御身と我との一とならん事、決して父君の許し給ふ所にあらず、御身、願くば、志を立て、發奮努力して、我家と同じ列の身分となりて、我父を說き給へ、我も、其間、必ず身を潔くし、行を正しくして、君の成功を待つべしと勵ましぬ、下僕大に其言に感じ、僧侶こそ、學問を積みて身を立てんには、屈强の地位なれ、今假に寺院に身をよせんには如かずと思ひ極めて、何某上人の門に入りて、苦學研精する事數年、日々夜々、その娘の事を思ひ出でゝは、撓む心を鞭韃しつゝ、かくて年月を經るに、心華漸く開け、道眼次第に明かになるにつけ、狹窄の牢獄、影を隱して、淵大宏朗の淨界こそ現はれたれ、小さき人、小さき愛、小さき悶えは、皆消え去り、法界の有情、無情、一として愛すべく、懷かしく、慕はしからざるはなく、平等の慈愛、萬物に偏滿して、こゝに眞佛土の莊嚴を見、さきの顚倒愛慾の跡を思へば

恍として夢中のかげを逐ふが如くなりしとぞ、後の世、某宗中興の大徳と云はるゝは、實にこの悟達せる下僕なりけり、

不思議なる、出世解脱の因緣もあるものならずや、やさしき女の思ひよ、けなげなる男の心よ、而も、又尊とき大德の得道と思召さずや、

紅日爛雲を涵す大海の波浪も、溪間の細流が、散り敷く木の葉を潛りし因緣ありしならずや、昔の愛着も、迷にあらず、忘想にあらず、すべて、皆、七寶樹林をかざりつべき金枝銀條なり、不思議なる因緣もあるものならずやと、老僧はくりかへしつゝ語り終りぬ、

姉上よ、小弟は、右の物語を聞きて、えならぬ思ひに滿ちつゝ宿に歸り申候、寺より宿までは、五六町、杉木立、畫、尙小暗き石道を下りつゝ、かの老僧の面貌をおもひ、其物語の人々を思ひ、更に又、はてしなき我世の行末を思ひつゝ、道の邊の名も知らぬ花草、その日はしも、たゞ、只管なつかしく覺えてつみ得ざりしもあやしく候ひし、

さるほどに今夜、孤燈の下、鷗外氏が麗筆になれる「文使」の一段を讀み候ひき、品高くうつくしきイヽタ姫の心は、自ら閉したる扉なりき、醜くき「缺唇」の兒は、我さへ知らぬ思ひ胸に充ちたり、喜びなき彼が生命は、只一管の笛に候ひき、夕月の光にこの笛を吹きすさび、なつかしき姫がピアノに合する時ぞ、彼が生命の悅樂の高潮なりき、かくて、姫はわれから世を狹めて、この世の尼寺ともいふべき宮仕に身を隱しぬ、あはれ、姫はいまさず、ピアノの音もなし、とある朝、城下の流れに繫ぎ捨てし小舟に、かの兒の吹き慣れし笛のみ殘されて、「いぐち」の面影は、その後見し人候はざりしとかや、……小弟は卷を掩ひて、燈に背きぬ、おゝ姉上よ、人情の祕密藏、其深さと、暗さとは、そも如何ばかりに候ぞ、噫、今夜はせめて、かの無邪氣なる御令弟でも御同伴したりしならば、如何に語らふふし多からんと、しみ〴〵旅情の濃かさを覺え申候、

いつにかはらぬ、とりとめもなき瞑想の糸、せめては、可憐と思召し、くりかへし御覽願上候、穴賢、（九月十日認む）

その十、輕快

山村の滯在も、はや、一ヶ月餘を過し申候、當地は、もはや、秋草も咲き揃ひ、夜は蟲のなく音もゆかしく存候、久しき溫泉療法の身に適し候ためにや、小弟の精神にも、多大の變化を來し申候、今ははや、憂愁も煩悶も、皆靜かに深き情緒となりて、清らかに美しき色を帶び來りて、言ふべからざる自信と、希望とを、感じ申候、實に、今までの生涯は、信仰と云ひ、道德と云ひ、宗教と云ひつゝも、皆、森の如く淡く、半睡的のものにて候ひし、今後は、すべて、皆、活潑なる、生命ある、確かなるものとなるべきを思ひ居り候、

運命の鐵鎖は、時空の間に、生を享けたる人の子を、繫縛し了り候へども、靈の翼は、之を超絕して、幽妙なる神交靈感の淨界に遊び得らるゝとは、これ何たる喜びに候ぞや、現實を超絕せる淨樂！、この世ならぬこの神酒を、少しにても味へるは、眞正に、惠まれたるものゝ幸福と存候、小弟は、涙の中より、我之を贏ち得たりと微笑し、こゝに始めて、實在の眞相に、幾分觸れ得たるをひたすら喜び申候、

畢竟、幸と云ひ、不幸と云ひ、悲と云ひ、喜といふも、深く事相の奥底まで突き入りて見ねば、何事も分らぬ事と存候、

自ら智慧と力とに誇りつゝ、而も、この根本義＝人世の眞相＝出世の一大事因緣に逢着せずに生を終る人々、比々皆然りに候、小弟は、今この憂愁と懊惱とを懷きながら、萬人の知らんと欲して、容易に知り得られぬ、或るエッセンスをば、おぼろげながら、掴み得たるを信じて、非常に喜び居り候、

傷けども力あり、悲めども望あり、あゝ、これ皆かの君の恩賜と存じ候、小弟の

今後の生涯は、彼君を讃美すると共に、延いて久遠の女性を讃美し、彼君の如き女性を、一人にても多く世に活すために働かねばならぬと覺悟致し候、

煩悶は不幸に候、されど、眞正の煩悶を知らずしては、或は、また、眞正の解脱に達するの道を知らずに終り候やも不知候、

世界の人を擧げて、小弟を誤解するとも、姉上のみは、小弟を正しく解したまはん、世みな小弟を疑ふとも、姉上のみは、小弟の行動を信じたまはん、過ぎにし方は詩歌の外に述ぶべき由もなく、行末の運命に至つては、神佛、唯これを知し召さむ、さらば〳〵、小弟は、安じて我志す所に力めむ、世のために盡さん、人の爲に身を捧げん、情景豐富なる人世に於て、愛あり、信あり、希望ある生涯を送らん、かく書きつゞけ候へば限りも無之、此上書き連ねて、姉上を驚かし、再び瘋癲院に電話をかけ給ふ樣にては大變につき、これにて擱筆致し候、おゝ姉上よ幸あれ、彼君も幸あれ、否々、一切の女性の上に幸あれ、おゝ姉上よ、さらば、

永久にさらば！、（九月廿五日）（明治四十一年）

我家の屏風

古刹といへば風雅に聞ゆれど、其實、荒れ寺のわび住居、どうもその、御粗末な荒壁から、もれ入る風が身にしみわたるので、或る時、大に奮發して、町から六枚折の屏風を求め來たのです、まづ、一年は、それを大事の金城鐵壁と冬籠つて見ましたが、そも〳〵その屏風なるものが、天保度か、文政度か、それよりずつと以前かの代物であるので、もう、蝶つがひも何も、ぼろ〳〵になつて居て、とても保存に堪へない、依つて、更に大に奮發して、その屏風を張り換へたのです、尤も、張り換へたといへばとて、おもてには何にもなく、唯、白紙の張りッぱなし、かうしておいて、誰でも來訪者の在つた毎に、合作風に筆を染めてもらはうと、待ち搆へて居りますと、恰度、そこへ、書家の陵洲老人がたづねて來られた、

まづ、幸先よしと、早速、老人に筆始めを頼みますと、直ちに承諾せられて、
「口を開いたをかしな爺さん」を畫かれたのです、まさか、御自分の肖像でもあるまいが、奇妙な、畫だとおもつてをりますと、これが即ち「笑ひ達磨の圖」だそうで、老人自から贊して、

『可憐世態如雲變、安得人心似水平』

と、書態もなか〳〵見事なもの、
次に、從弟の金華生が來て、

『雲冠芙峯、月映清波』

とかき、おなじく巨人君は、

『霜の夜半庵主が鼓きかんかな』

柏樹道人は、あまり進まれないのを、強ひて願つたら、禪版の形の中へ、

『須彌倒卓』

と書いて、而かも、まだ〳〵、須彌を蹴ちらかす勇氣丈では、本ものではありません、本來の面目を發揮するには、もう一段の工夫が肝要ですなどゝ、話してかへられました、
國からはる〳〵出て來た、治彦君は、

『ながらへていつまで世をば塞ぐらむ
　早く死ねかしはやくしねかし』

とぬたくつて、しかも、
「僕は、これでも、大に拜祝したつもりですよ、世はすべてさかさ事と申しますからナア、」
とは、すさまじい御挨拶！、
故人野の人は、

「神さびし神代なりせば千鳥とも

我はならまし三保の松原」

といふ歌を書きましようかと云はれるから、「どうぞ」というておいて、さて出來上つた所を見ますと、

『衛生の學理こちたし狸寺』

と書いて在るのです、「まあ、あんまりひどい」と腹を立てゝもあとの祭り、その朝、澤山喰べたいと云はれた、お餅を、少しくお控へなさいというた意趣がへしてすとさ、

不却生が、

『秋長けて庵主は病めり清見潟』

としるされた上に、九曇居士は、墨くろ〳〵と、

富士の山を畫いて下さつた、由來、居士は、畫家ではないのですが、「盆石」の名人丈在つて、何となう、黑い富士にも、おもむきが在るのです、

雷夢君は、その富士の傍に、

『清見潟夢の月さす松原に

千鳥の戀を一夜きかまし』

とやさしくかきつけ、

茶峯さんは、あたり、さはり、のない樣にというて、唯、

『洋々』

といふ二字をしるされたばかり、

月嶺大和尚來駕の折は、椋鳥博士發明の枇杷酒を御馳走しておいて、さて是非一筆をと乞ひ奉ると、和尚は、いかめしき御容子に似もやらず、しきりに辭退した後に、

『雲門の胡餅にまさる枇杷酒かな』

と、提示された、

酒顚童子の匹坊は、

『極重惡人、無他方便』

と、拙劣な文字でよごしたので、まさか、其儘でも、おかれぬと、雪舟禪師に願つて、

『唯稱彌陀、得生極樂』

と、下句をつけて戴いたのてす、

縣知事の李家樣が御夫婦て御來訪の折に、達磨の一筆畫と、

『禪膽武力』

といふ賛とを、心よくかいて下さつた、

この李家さんは、亡夫とは豫備門時代の舊友て在つた爲めに、私が縣下に滯在せるを知つて、わざ〳〵悔みながら御出て下さつたのてすが、自分がある地位に達すると、知つても知らぬ顔をする、世の中に、一寸、珍らしい方だといふ人もありました、

姉崎博士は、屏風を持出しますと、まるて、强請的てすなアと笑ひながら、

『天地の緣とかして夏の水』

と書いて下さいました、

ドクトルの小鈎先生は、海外に遊學中の舊作だというて、

『古鄕遠　思不爾都景天　彈琴乃

調弊耳可與不　三保能浦風』

と、萬葉風に、立派に書いてくれました、序ながら、この小鈎先生は、一絃琴が御上手なのてす、

烏々居士に、何か書いてといひますと、僕は、「權利義務の沒風流漢、おまけに、俗中の俗な實業に從事して居るのてすから、何も文句を知らないて、」と云ひつゝ寺に在つた、古い蟲喰ひ本の中から、

『泥丸一路百花發、地獄天堂脚下春』

といふ文句を撰り出された、この文字から見れば、居士も、なか〳〵俗ではないらしい、

愛濤漁郎君は、到底、不合理なのでなければ、御氣に入りますまいからというて、

『三保近き里には住めど天女とは
　化けさうもなき古狸かな』

と、やつてのけて、聊か御得意の容子、しかし曾て、

S博士の、狸婆に對する贊に、

「古狸富士見の村に穴居して
　百姓共をだまし喰ふかな」

と、ありしに比しては、いさゝか遜色ありと評する人あり、

直行の汽車をわざ〳〵降りて、雨の中をわざ〳〵來訪された特志家如空生は、「小生等の様なものは、目に立つ所へ書かねば引き立たぬ」というて六枚の眞ん中へ、

『靜かなる秋の雨夜の狸寺
　きぬたにかよふ腹鼓かな』

は、なか〳〵振つたもの、

酒屋の藏人さんは、

『つり船の貝の音にすむ秋の海』

とかいて、どうです、吾輩は、生れて始めて俳句をひねつたのですが、なか〳〵一寸月並ではないでしようとの御愛嬌！、

鹽溪老衲は、「湘南第一春」だというて、「大きな梅の古木」を書いてくれられましたが、さあ、これから先がどうなりますやら、こゝらで、一寸一服に致しましようか、

外には木枯がしきりに吹きすさんで居る様子！！、（明治四十三年）

一里塚

今年は中年ですネ、……そして、もしも一方に、猿から進化した、えらい人間様が御出なさるならば、私などは、さしづめ人間から、猿の方へ退化した、境涯に在るのです、併し、私は、寒峡夜月に啼く、厭世家のましら殿は眞似たくなくて、唯、深山幽林の間に、優遊嬉戯する自然兒のおさるさんを學びたいのです、若しそれ、時にチョッカイを出してあたりの御方に、傷をつけても、つまり、林中の野人の惡戯と、偏に御許しを願ひたい、そこで、先づ、知友諸氏の年賀狀から、チョッカイにかけて、ひッかかうといふのです、

『謹賀新正と申すは表ばかりなり、　椋鳥呆造』

明治四十一年一月一日

その位なら、一層、おもひ切つて、年始狀なんか御出しにならなければ、却つて、えらいと、ほめて上げますのにネ、

『未だ、矢の根の痛みを知らざる此ハートに、おー神よ、願はくば、今年もめぐみあらせ給へ、　異敎道人』

一九〇八年

これは、彩色つきの、極めてあざやかな繪はがきに題して在るのです、いともかはゆき、天使のもてるハートには、いまだ、矢が立たず、あたりに、散亂して居るハート形には、みんな矢がとほつて居るのです、けれど、こんな、しらくしい事をいふ人のハートには、既に〳〵毒矢が、根深く立つて居るかも知れませんよ、　若葉生

『昨日〇〇家に年始に行て、壁に懸れる婆公の肖像を拜して、

死期近きにやと、稱して三昧に入る、數珠を手にして端座の姿尊し、所が、

仙乎、狸乎、福々顔、これては、死神の方て、跳走で逃げむ、』

折角の事に、お線香でも、供へて下されば、よかつたのに！、

右三途河を渡りて地獄行
一里塚　突厥將軍筆
四十一年正月元日
左靈鷲山下を經て極樂行

『而して、大姉の右行なる事は、小生が、拳大の印を押して保證する所に候、』こんな事をいうてよこす、有髯の惡太郎もあります、

俗夫人

『御目出たいか、からぬかは、別問題ながら、兎に角、門松を立て、御雜煮を喰べたので、明治四十一年が、どこからか、舞ひ込んだ樣な氣になり、至極、呑氣なお正月です、

年毎に淨土の道は近づけり
あとがつかへるいそげ物共』

あまり追ひ立てられると、つむじまがりの私は、却つて、永く滯在して、困らせて上げたい樣な、心持にもなります、

『恭賀新年、明治四十一年一月元日

斯う云ふ、金文字摺の葉がきが、舞ひ込む樣になつたのも、文明風の吹き廻し、茅屋の名譽と心得べし、……ハクショー、ア、、屠蘇に醉うた〳〵、

遊園子』

一年に、たつた、一度の年始狀を、印刷摺でよこすさへあるに、わざ〳〵添へ口上までしたなどゝは、以ての外、禮を缺けりやと申すべき、……呵々、……印刷摺といへば、米峯兄のも、羅馬字式の印刷で、ソレワ〳〵、ハイカラなものです、

『Meji 41 nen 1 gatsu 1 nichi.
Shinnen Omedetō zonjimasu.
Y. Takashima.』

それかとおもへば、社頭松の立派な繪はがきに、歌や句を書いたのもあります、

『神垣の内外ゆるがぬ大御代の
　しるしと立てり神の老松』　明石浦人

『大神の高きみいづを松が枝の
　とはにかはらぬ色にこそみれ』　直老人

『五十鈴川清き流れに萬代の
　かげをうかべてしげる松かな』　安達黒人

『みたらしを守る常盤の松かげを
　むすびて君が千代いのるかな』　みぶ子

『住の江や神代ながらの松の春』　御風

『神詣て先づ仰ぎみるしめの松』　波動

『年毎にあゆみを運ぶ神垣に
　まづ仰がるゝ松のかげかな、
神守る御垣の松は年ふりて
　松をも神と人のいふなり、
住吉の神のみかきに詣づれば
　松は嵐に千代よばふなり、　仙界山人